江戸文學圖錄

解説篇

藤井博士
還曆紀念

江戸文學圖錄

解說篇

江戸文學圖錄解說篇目次

假名草子　（一――七頁）

浮世草子　（八――一四頁）

八文字屋本　（一六――二〇頁）

赤本・黒本・青本　（二一——二五頁）

洒落本　（二七——三二頁）

讀本　（三三——三七頁）

滑稽本　（三八――四三頁）

人情本　（四五――四八頁）

合卷　（五〇――五二頁）

談義物　（五三――五五頁）

和歌　（五七――六〇頁）

浄瑠璃

歌舞伎

歌曲

俳諧

（八〇——八九頁）

雜俳

（九一——九四頁）

狂歌

（九五——九九頁）

狂詩

（一〇〇——一〇一頁）

江戸文學圖錄解說篇目次（終）

假名草子

假名草子といふのは、江戸時代の初期に出來た通俗的な文學を總稱する名である。寛永から萬治・寛文の頃に多く現はれて居るが、未だ充分に小說として獨立することが出來ず、或は訓蒙的に儒佛の道を敎へたもの、或は怪談異聞を集めたもの、或は軍記物の類或は小說的地理書、或は古物語に擬したもの、或は滑稽な小話を集めたもの、或は御伽草子の流を汲んだものなどの類である。當時の作者が大きい傑作を作るだけの才を持つて居ないので、たゞ小手先の器用で、假名交りの面白い讀物を提供するに過ぎなかつた事も、かうした文學の生れる重大な原因であるが、一般民衆の敎養が低くて、文學を鑑賞するだけの餘裕のないことが、假名草子發生の最も大きい原因であると思はれる。訓蒙的であることと、幼稚な滑稽味のあることと、これが假名草子の二大特色であらう。

是等の假名草子を種類に分けて見ると、

(一) 軍書物には――大坂物語、北條五代記等。
(二) 地理書物には――竹齋物語　東海道名所記、京童、色音論等。
(三) 敎訓物には――二人比丘尼、因果物語、百八町記等の佛敎的なもの、淸水物語、堪忍記等の儒敎的臭味多きもの、可笑記、爲愚痴物語等の神儒佛三敎一致の立場をのべたもの。
(四) 外國の翻譯飜案物には――棠陰比事、伊曾保物語、伽婢子等。
(五) 怪談物には――犬張子、伽婢子等。
(六) 笑話物には――昨日は今日の物語、醒睡笑等。
(七) 戀愛物には――恨の介、薄雪物語等。
(八) 擬物語には――尤の草紙、仁勢物語、犬つれづれ等。
(九) 遊里案內物には――そゞろ物語、あづま物語等。

がある。作者としては、淺井了意、鈴木正三、如儡子、山岡元鄰などがすぐれた方であらう。

一、恨の介 (Uraminosuke)

作者　未　　詳

體裁　美濃形大本　二　册

出版　寛永時代に木活字本ありといふ。明暦二年に再板され、更に寛文四年に三板行はる。著作の年代も明かではないが、慶長末年の頃の作であらう。

内容　足利時代のお伽草子の系統をひいた戀愛物語である。葛の恨の介といふ者が清水寺に參詣して美人を見染め、切なる思に堪へかねて觀音に祈誓をかけ、夢想によつて美人の乳人の在所を知り、其の女が木村常陸之介の娘であることを知り、乳人や姫の友人等の手引によつて文を贈つてやがて契を結んだ、しかし人目の關のために思ふまゝに逢ふ事も出來ず、恨之介は焦れ死をする。その最後の時の手紙を姫が見て、これも亦悲歎のために自殺し、乳母、腰元に到るまで姫に殉じて自殺するといふ物語である。女が殉死するとか自殺するといふ所に徳川初期の世相が見られる。文章は粉飾多くて印象不鮮明であるが、元和偃武以前の戀愛物語である所に、江戸小說史上の價値が見られる。

圖錄　(1) 上卷一丁表

二、伊曾保物語 (Isoho Monogatari)

作者　未　　詳

體裁　美濃形大本　三　册

出版　寛永十六年卯月出版の木活字本(なほこの外木活字の異版が數種ある)
萬治二年正月出版、繪入本、伊藤三右衛門板(本書にはこの方を取つた)

内容　上卷二〇、中卷四〇、下卷三四、計九十四の小話である。その中、初めの二十九までは、イソップの傳を書いたもので、種

種の頓智や才覺を所々であらはした事を語り、後の六十五章がイソップ物語を飜譯した動物の譬喩談である、西洋文學の飜譯物として注意すべき價値がある。

尚、イソップ物語は、すでに文錄年間に於て、ローマ字を以て邦語に飜譯せられてゐるが、それと本書とは無關係である。

圖録 (2) 表紙　(3) 上卷目錄の一部と最初の半丁　(4) 中卷廿七丁裏と廿八丁表

三、尤の草紙 (Mottomo no Sōshi)

作者 未詳

體裁 美濃形大本二册

出版 寛永九年林鐘上旬　恩阿彌開板
寛永十年六月(再板)　書舍中野氏道伴板
慶安貳年中春(三板)　藤井吉兵衛尉板

内容 古の物語に擬して、これを滑稽に作りかへた擬物語の中最も古い部に屬する。この書は枕草紙をもぢつて作つたもので、所謂物づくしである。長きもの、短きもの、高きもの、ひくきもの等、八十の物づくしを上下二卷に收めてゐる。例へば「むさき物のしな〴〵」には、「掃除せぬ庭、ふるだゝみ、はたごやのめし、はげたるわんおしき……若衆のはがすみ、はなくそ、目くそ、つまくそ、まづしうてへつらふ人、何よりもきたなきは戀の道。戀といふそのみなかみをたづぬればばりくそあなのふたつなりけり」の如く、滑稽の中に江戸時代の色を濃く出してゐる。

圖録 (5) 本文の最初三丁表　(6) 最後の丁、跋文と刊記

四、竹齋物語 (Chikusai Monogatari)

作者 烏丸光廣の作といはる。

體　裁　美濃形大本　二　册

出　版　寛永年中の出版。作られたのは、寛永十二、三年の頃であらうといはれる。

内　容　山城の國の竹齋といふ藪醫者が、一向にはか〴〵しく流行らぬ故、郎黨のにらみの介なる者をつれ、名所遊覽を志して家を出で、洛中洛外の名所を見物して、樣々の面白きことを見、それより江戸へ下る道中を書き記した道中日記である。大體上卷は京都名所、下卷は東海道の道中を記してゐる。主從が到る處で無邪氣な失敗や滑稽を演じて、狂歌をよむといふ風で、一九の膝栗毛式なものである。此物語大に時好に投じ、これに擬して作つたものに、新竹齋、竹齋行脚袋　竹齋療治の評判等が出版せられた。

圖　錄　(7) 本文最初一丁表　(8) 竹齋がにらみの介と談合してゐる挿繪

五、可　笑　記 (Kashōki)

作　者　如儡子(如儡子は湯村式部といふ東國武士の戲號であるといふ)

體　裁　美濃形大本　五　册

出　版　寛永十九年季秋　大阪心齋橋通西入南久寶寺町南側、平野屋九兵衞板。但し本書奥書に「于時寛永十三孟陽中韓江城之旅泊身筆作之」とあるから、本書の成立は寛永十三年である。

萬治二年京都寺町三條上ル町山本五兵衞より繪入風流可笑記として、繪入に飜刻して居る。同じく五卷。半紙本である。

内　容　隨筆式のもので、小說の結構をもつたものではない。徒然草などに摸したのであらう。支那の格言を引き古代の逸話等をあつめ、武士たる者の心得を記し、懦弱驕奢の戒むべきを說き、諷世警俗の敎訓を主として說いたもので、間々滑稽を交へて讀み飽くことなからしめてゐる。やゝ後の心學道話に似た所もある。

この書頗る世にもてはやされ、流行の結果、可笑記跡追、可笑記評判、新可笑記等、これにちなんだ作が多く現はれた。所謂敎訓小說の祖と稱すべきものである。

圖録 (9) 第一巻一丁表序 (10) 第五巻最後の丁八十四丁裏と八十五丁表

六、清水物語 (Kiyomizu Monogatari)

作者 朝山意林庵

體裁 美濃形大本 二册

出版 寛永十五年十月版(板元記されず)。再板は正保二年五月、出雲寺和泉椽板である。

内容 上巻は一巡禮が清水寺に參詣して、一老翁に會ひ、問答する體に、下巻は其の巡禮が下向の途で種々の談話を聞いた體にして記して居る。内容は儒教佛教の問答で、堅くるしく、小説とは言ひ難いものであつて、教訓を目的とし、佛教を抑へてやゝ儒教をあげて說いたものである。

この書の駁書とも見るべきものに祇園物語がある。暗々裡に佛を賛して儒を貶して居る。その他、此書に倣つたものに、大佛物語、糺物語、海上物語等が出て居るが、何れも堅くるしく小説には遠きものである。

圖録 (11) 表紙 (12) 上巻本文最初二丁表

七、棠陰比事 (Tōinhiji)

作者 未詳

體裁 美濃形大本 五册

出版 慶安二年十月 安田十兵衛開板 延寳元年に再板せられ八巻本となる。

内容 支那の裁判小説なる棠陰比事を飜譯したもので、五巻に亘つて百四十四の裁判話を載せてゐる。漢文を和らげたゞけのものであつて飜案ではない。

この書に倣つて、本朝櫻陰比事（西鶴）鎌倉比事（月尋堂）などが出版され、我國の裁判小說の祖をなしたものである。文學的價値は乏しい。

圖　錄　(13) 表　紙　(14) 第一卷本文最初一丁表

八、東海道名所記 (Tōkaido Meishoki)

作　者　淺井了意の作といはる。

體　裁　美濃形大本　六　冊

出　版　萬治二年頃といはる。

內　容　江戶の樂阿彌陀佛といふ僧が江戶から東海道を通つて京都へ上ることを記した道中記である。竹齋物語が寓言を主としてゐるに對して、本書は、驛々の里數、宿々の駄賃などまでを記して、東海道旅行者の便に供した地理書の趣がある。所々の名所の由來、名勝の景色等をものべ、その間に即興の狂歌や俳句をはさみ、文章も輕妙で、當時の人情風俗等もよく現はれてゐる。名所記中の傑作と稱すべきものである。

圖　錄　(15) 第四卷表紙　(16) 第一卷本文の最初一丁表　(17) 第六卷十丁表、「山科より京まはり宇治迄」の條の插繪上は清水寺の遠見、下は三條大橋、右端の僧形の人物が樂阿彌

九、二人比丘尼 (Ninin Bikuni)

作　者　鈴木正三

體　裁　美濃形大本　二　冊

出　版　寛文四年三月　山本九左衛門板。翌五年正月松會によつて再板。更に寶永七年に井筒屋より三板を發兌して居る。

内容　佛教小説で七人比丘尼に次いであらはれたものである。下野國住人須田彌兵衛の妻女が、夫の討死の跡を弔ひ戰場にたづねて行き、野中の堂に宿つた夜、數多の骸骨が無常の歌を唱へて踊るを見て發心し、それよりあたりの家に宿を求め、其の家主なる女の身の上話を聞き、共に佛道に入ることを約したが、程なく其の女が病歿し、其の姿の變りゆく樣を見て益々無常を觀じ、後禪尼に就いて修業し頓悟するといふ物語で、文章もかなり巧に最も小説的に出來てゐる。東坡の九相詩などから暗示を得た處も面白い。作者鈴木正三は三河武士であつたが後禪僧となつて佛教を廣めた人で、本書中にも禪的な心境をのべた所が見える。

圖録　(18) 上卷二丁表、本文の最初　(19) 十三丁表、須田彌兵衛の妻が骸骨の踊を見る挿畫

一〇、伽婢子 (Otogibōko)

作者　瓢水子松雲（淺井了意の別號）

體裁　美濃形大本　十三冊

出版　寛文六年三月　京寺町通圓福寺前町秋田屋平左衛門板。元祿十二年に再摺し、文政九年正月半紙本として三版を出して居る。

内容　所謂怪談小説の祖であると共に、支那小説の飜案物としても有名である。支那の剪燈新話や剪燈夜話の中から、抄出し飜案し、又中に我國俗間傳へる處の怪談奇談をも交へ、十三卷に六十四の怪談を載せてゐる。支那の怪談を飜譯したものであるが、それ等は何れも近世に我國にあつた事の如く、其の地名、時日までもあげ、人物などは勿論日本化して作られてゐる。文章亦簡潔にして巧である。剪燈新話は足利末には我國に移入せられて居り、慶長年間には飜刻せられて居るから、了意はそれ等に依つたものであらう。此書の流行と共に犬張子、玉櫛笥、玉箒、お伽百物語、御前御伽婢子等相次いで世に現はれた。

圖録　(20) 第一卷四丁表序文の一節と五丁表本文の最初　(21) 第三卷十七丁裏と十八丁表、牡丹燈籠の條の挿繪

浮世草子

浮世草子は天和二年の西鶴の好色一代男から始まる。浮世は廣い意味の人生をいふのであるが、狹く言つて好色といふ意味にも用ひられる、即ち當時の世相を、當時の人情風俗を、ありのまゝに描き出し、言語文章も古文古語の古めかしさを捨てゝ、自己の日常の言語を以て寫したものである。內容形式のすべてに於て新しい所に、浮世草子の意義があり價値があつたのである。

浮世草子の種類は、大體から見て好色物、武家物、町人物の三種に分ち得る。好色物は性慾と戀愛を中心として、遊里や劇場が其の背景を成して居る。これが元祿時代に歡迎せられたのは無理もない。町人物は金の世界を描いた。金を中心とするさまぐの生活、葛藤、そこには元祿町人の半面が痛々しいまでに描かれて居る。「とかく浮世は色と金」といふ諺は、浮世草子の性質をも道破して居るのである。武家物は武士の義理と意氣地を書いたものであるが、前二者に比して生彩に乏しい。

浮世草子の作者としては何といつても西鶴が偉い。彼は新しいものを創めて、しかも最も偉大な作を成しとげた傑物である。彼に文藝意識ありやなどゝいふのは野暮である。彼程に元祿人を明確につかみ得た作家はない。我々は其處を味はへば良い。好色物としての一代男、一代女、五人女、町人物としての日本永代藏、胸算用、何れも傑出した作である。

西鶴に追隨した作者に、北條團水、月尋堂、西澤一風、錦文流等が居る。是等の作家は觀察筆力共に西鶴には劣るが、又西鶴に缺けた全篇の趣向などゝいふ方面に特色を見せた處がある。團水の晝夜用心記、日本新永代藏、月尋堂の今樣二十四孝、鎌倉比事。西澤一風の亂脛三本鑓、傾城武道櫻、丹前能。錦文流の棠大門屋敷、熊谷女編笠など、何れも代表作と稱し得るものである。

一、（論入）好色一代男 (Kōshoku Ichidaiotoko)

作者　井原西鶴

體裁　美濃形大本　八册

出版　初板、天和二年陽月中旬、大坂思案橋荒砥屋孫兵衛可心板。再板、半紙形本八卷、貞享四年九月中旬、江戸日本橋青物町大

津屋四郎兵衛板。挿畫は菱川師宣。これを江戸板といふ。

内容　世之介といふ好色男の一代の生活を描き、七歳戀を知り初めてから世にある程の戀をし盡し、六十歳の時、好色丸に乘じて女護島に渡るまでを寫したもの。全巻五十四節に分れ、一節を一年にあてゝ五十四年間の記事としてゐるが、全體の有機的構想を缺き、個々の說話を世之介といふ主人公を以て連ねたものである。三都は勿論、西は長崎東は仙臺まで、諸國の色里を描き、遊女野郎其の他種々の賣色のこと、及び素人の情事をも記してゐる。

文章は俳諧的で、簡潔遒勁。觀察するどく冷やかで、當時の世相の表裏をありのまゝに描いてゐる。浮世草子の最初の作で、しかも傑作と稱すべきもの。後の浮世草子に甚大の影響をあたへてゐる。

圖錄　(22) 第四巻九丁裏、「夢の太刀風」の條　(23) 第八巻最後の丁裏　(24) 第一巻四丁表「けした所が戀のはじまり」の條の挿繪　(25) 第四巻十丁表、「夢の太刀風」の條の挿繪

二男色大鑑 (Nanshoku Ōkagami)

作者　井原西鶴

體裁　美濃形大本八冊

出版　貞享四年正月　大阪伏見吳服町淀屋橋筋、深江屋太郎兵衛板、京二條通、山崎屋市兵衛刊

内容　本書一名を本朝若風俗ともいふ。題名の如く男色に關する小話を八巻四十節にわたつて記して居る。その中初め四巻は一般士民の若道關係を寫し、後四巻は歌舞妓若衆の男色を描いたもので、何れも個々別々の短篇である。著者が好色本から武家物へ移る過渡期の作として注目すべき作である。

文章は、同年刊行の武道傳來記や、翌年の武家義理物語に似通ひ、彼の好色本中に於ては駄作の部に屬すべきものと思はれる。たゞ其の内容が衆道といふ特殊の世界を寫し、若衆氣質念者氣質を描くと共に、忠義眞實義理等を重んじ果は心中に到るといふ樣な所を描いてゐる所に特色がある。本書には彼が署名(鶴永松壽の印)の上序文を出して居る點が、從來の好色本と一寸異る

所である。

圖錄 (26) 第六卷表紙 (27) 第三卷五丁表「編笠は重れての恨」の條の挿繪、近江國筑摩祭の畫 (28) 第八卷最後の丁裏

三、好色産毛 (Kōshoku Ubuge)

作者 雲風子林鴻

體裁 半紙本五册

出版 刊行年代不詳。種彥はその好色本目錄に「梓彫の年號は見えざれど元祿初めの印本なるべし」と言つて居る。京都和泉屋弘之刊。

內容 好色に關する短篇を各卷に五つづゝ(卷五だけは四篇)、合計二十四篇を收めたもので、筆致はあくどい描寫がなく、かなり輕妙淸新の趣に富んで居る。西鶴の亞流としては、傑出した作の一つであらう。作者は堀江氏、似船門の俳人として名高く、「京羽二重」「あらむつかし」等の著がある。自ら好色本の筆始めとして、この書に産毛と題した由を序に言つてゐるが、この外にもなほ浮世草子の作があるといふ。「花見車」によれば書畫をよくしたさうで、種彥はこの書も自筆自畫だらうと言つてゐる。

圖錄 (29) 序文 (30) 卷之一の本文一丁表 (31) 卷之三中の挿繪

四、女大名丹前能 (Onnadaimyō Tanzennō)

作者 西澤次郎冠者(西澤一風のこと)

體裁 美濃形大本八册

出版 元祿十五年初春 京押小路麩屋町金屋市兵衛板

內容 同人作の御前義經記(元祿十三年板)の續篇とも見るべきもので、太郎冠者が殿の御前で御前義經記を讀んで賞美にあづか

つた故、次郎冠者も作つて見ようといふので、丹前能を作り腰元衆に役々をふりつけ、思ひつきを八段に綴るといふ意味の序文がある。各章の題目は、謠曲をもぢつたもので、妻戀舟高砂から、御祝言鶴龜に到るまで二十八章あり、詞句も多くその曲のものをもぢつてゐる。そして全篇を貫く主人公は丹前之介、女主人公は男裝した千代之介で、それの樣々な戀の葛藤を、各章に謠曲もぢりに描いてゐる。頗る念入りな構想の割には印象が乏しい憾がある。

圖　錄　(32) 第一卷目錄の一部　(33) 第一卷十丁裏十一丁表、「男色生田敦盛」の條の本文と挿繪

五、世界萬寶立身大福帳 (Risshin Daifukuchō)

作　者　唯　樂　軒

體　裁　美濃形大本七册

出　版　元祿十六年中夏。板元は、京二條通　三崎庄兵衛、江戸黑門町　中野孫三郎、大坂平野町　三崎半兵衛の三名

內　容　西鶴の町人物の系統を引いたもので、町人としての立身の道を說いた敎訓的な物語である。世智辛い商賣の波を、正直と才覺と儉約とで泳ぎ切る行き方を示したもので、西鶴のやうな奇警さも文の妙味もないが、所々に人をうなづかせる面白味がある。一卷から五卷までは、立身者の物語として、川里善兵衛、丁稚市太郎、手代久三、肥後屋茂兵衛、只右衛門の五人の商業術を物語風に描き、六七兩卷には儉約の實際を敎へるために、飯の焚きやう、薪の割りやう、鍋ずみの取やうから、油土器、鼻紙、塵紙、盃などに到るまでの德用法、紙屑の拾ひだめのことまで七十五條ほどの實際問題についてのべてゐる。誠に立身大福帳である。

圖　錄　(34) 第二卷表紙　(35) 第一卷本文の最初、一丁表　(36) 第一卷四丁裏「貧福は一心が本」の條の挿繪

六、難波長者棠大門屋敷 (Karanashi Daimonyashiki)

作者　錦　文　流

體裁　美濃形大本　五　册

出版　寶永二年中夏　浪花本町一丁目　書林松壽堂　豐屋彦太郎板

內容　淀屋辰五郎の事件を脚色した作で、江戸屋初五郎こいふ名にしてゐる。江戸屋の基礎を作りあげた與茂四郎、その子與茂九郎の豪遊や金雞の怪事、遊女大橋のここ等を前半に描き、與茂九郎の一子初五郎の遊蕩こ忠義手代藤七この爭、珍齋の死靈の出現から江戸屋の沒落に到るここを後半に記し、全篇一貫した筋の物語である。

淀屋の闕所は寶永二年五月といふから、其の事件を直に描いて際物的に出したものであらう。

文章は西鶴には遙に劣り、西澤一風などよりも劣るこ思はれる。ぎごちない漢文風の所や、四六文風な氣取つた文章もあつて、すつきりしない。

圖錄　(37) 第一卷二丁表、本文の最初　(38) 第二卷六丁表「方便の借座敷」の條の挿繪、與茂九郎が都のさる上﨟の許に忍ぶ畫

七、晝夜用心記 (Chūya Yōjinki)

作者　北條團水

體裁　美濃形大本　六　册

出版　寶永四年四月。板元は、京都井筒屋庄兵衛、萬木次兵衛、江戸日本橋南一丁目　須原屋茂兵衛の三名になつてゐる。

內容　各卷を六つづゝの小話をのせてゐる。內容は繁平の序に「世間に謀計(かたり)子こいふ者、僞をたくみ辯舌を以て人を誑し、金銀を掠め奪ひし方便、古今の間語り傳へしを、三十六種に書きつらねたり。這裏虛あり實あるべし。唯だ民家用心のために記して、眞僞覺悟の種に編める者也」とある如く、騙盜の種々相を取りあつめた物語である。

此の書は棠陰比事以後流行した裁判小說の傍系とも見るべきもので、西鶴の作といはれる櫻陰比事に次で、其の弟子たる團水の晝夜用心記の出たのも偶然ではない。團水は西鶴の筆致を摸してゐるが、其の才師に及ばず、奇警なる點の足りぬ憾がある。

圖錄 (39) 第一巻序文と目錄の一部　(40) 第三巻七丁裏「東山は諸國の開帳場」の條の挿繪と八丁表

八、今様廿四孝 (Imayō Nijūshikō)

作者 月尋堂

體裁 美濃形大本六冊

出版 寶永六年六月。板元は、江戸通石町十軒店　野田太兵衛、京都寺町二條下ル町　書林善兵衛、京　萬屋次郎兵衛の三名である。

内容 支那の二十四孝に摸して作つたもので、孝行者の小話二十四を六巻に分載したものである。作者の自序に「郭巨が子を埋む無分別、老萊子がよい年してのあいだれ、是れ孝行とは合點まゐらず、爰になきさまある俤を文盲に綺語をつひやしかける所の六冊、物知つた人の目からは、これもほんのことにあるまじ……」とのべてゐる如く、大體當時の世相を背景として、作者のあるべかしく想像した作り物語であると思はれる。

作者は西鶴を摸倣した人であるが、其の文章は、西鶴のするどさも奇警さもなく、その代りに平淡で條理立つて居る所は、むしろ八文字屋の作風に近いといふべきであらう。

圖錄 (41) 第一巻三丁表、本文の最初　(42) 第三巻四丁表「善惡吹わくる薄原」の條の挿繪、上は孝子彌惣次が母に孝養を盡す畫、下は彌惣次の事を訴人して自分の命を助からうとした善次郎が却つて並木松右衛門に殺される畫　(43) 第一巻一「世の人の鏡山」の條の挿畫

九、文武君が代さゞれ石 (Bumbu Kimigayo Sazareishi)

作者 石別子

體裁　美濃形大本　六　冊

出版　正徳二年正月。板元は、京　大黒屋徳十郎、柏屋勘右衛門、和泉屋茂兵衛、江戸　小川彦九郎、大阪　須藤權兵衛、瀬戸物屋傳兵衛の五名。

內容　一卷に三つづゝや、敎訓的な臭味ある武家の物語をのせ、全卷十八の小話をのせたものである。各話の題目の上に智・孝・義理・勇・仁・情・禮・義、又は非・惡等の印をつけ、又序文に「文を袂に武を袖にして、心の帶のむすび、別るゝ道は五つの常の外なし、されどその端をさぐり、此綺語をつひやして、八百日の濱のまさごをひろふものか」とのべてゐる處に、作者の意圖も想像せられる。文章は西鶴に似て簡潔であるが、平淡で奇警さが乏しい。

武道眞砂日記と改題したものは本書の第六卷を缺いたものである。

圖錄　(44) 第二卷表紙　(45) 第一卷一丁裏と二丁表、序文の終と目錄。この圖だけは後刷本を示したので初版には「時に正徳二つのとし千代の春うらゝかなる日」としてたゞ石別子の印だけある。再版のとき年號を削り月尋の作と僞つたのであらう　(46) 卷二十七丁表、「京信國の棒ざや」の條の挿繪、浪人白石角之丞と角崎又右衛門と信國の刀について口論する畫

一〇、かたき打亂脛三本鑓 (Midarehagi Sambonyari)

作者　西澤一風

體裁　美濃形大本　六　冊

出版　享保三年　京寺町通四條下ル町　菊屋長兵衛板

內容　二卷に一篇づゝ都合三つの女敵打の話を描いてゐる。當時の實際あつた事件に取材したものである。第一は雲州松江の玉井宗義が、女房おかん及び密夫池田軍次を討取つた話。第二は作州津山の小出重左衛門が女房おしゆん及び密夫倉橋藤九郎を打取つた話。第三は丹波笹山の出石勘右衛門が女房おかね及び密夫水島小八郎を打取つた物語である。この三人ともに武士で所謂槍一筋のあるじである所から、三本鑓といふ題名をつけたものである。近松の鑓權三重帷子もこの第一の話に取材したものである。

(47) 第三卷表紙

(48) 第一卷一丁裏と二丁表、目錄の終と本文の最初

(49) 第二卷二十丁裏と二十一丁表、「うつゝのかけはし」の條の挿繪、右は玉井宗義、小林彌七郎の兩人が大阪藏屋敷に出頭して仇討の許しを乞ふ所、左は高麗橋の上で宗義が女敵を討つ所

八文字屋本

八文字屋本は系統から言へば、浮世草子の中に入るべき性質のものであるが、其の版元や書物の體裁などから、特にかうした名で呼ばれて居るのである。八文字屋は書肆の名である。淨瑠璃本や役者評判記の版元として有名であつたが、元祿十四年に傾城色三味線を出版したのが、八文字屋の浮世草子の最初である。これは役者評判記の體裁に倣つたものであるが好評を得た。作者は江島其磧である。

江島其磧は放蕩の爲に產を失つた人間だけあつて、よく世態人情に通じ、趣向のたて方にも長じて居た。彼の作風は西鶴と近松を交へた所があり、人情を寫して精しく文章亦流麗であり、秩序整然として諄々と說く所、大に時好に投じた。浮世草子の作者として西鶴に次ぐものと稱し得られる。

八文字屋本の好色物としては、傾城色三味線、風流曲三味線、傾城歌三味線、野白內證鑑、傾城禁短氣、傾城傳授紙子等が有名で、町人物としては、善惡身持扇、商人軍配團、時代物としては、百姓盛衰記、西海太平記等が有名である。なほ其磧の始めた氣質物には世間子息氣質、世間娘氣質、浮世親仁氣質等があつて、西鶴の浮世草子以外に一つの新しい試を出したものである。ねらふ所は息子、娘、親仁などの通有性を描くにあるが、それ等を誇張して描き出して居る處に面白味がある。

其磧は八文字屋と不和となつて、正德四年から享保四年にかけて獨立して出版したが、双方共に不利をさとつて遂に又合同した其磧以外に八文字屋本に筆をとつた作者に、增田圓水、多田南嶺などがある。作家としてはいづれも其磧に及び難い

一、遊女名よせ 傾城色三味線 (Keisei Irojamisen)

作者　八文字屋自笑（實際の作者は江島其磧）
體裁　横本五冊
出版　元祿十四年　麩屋町誓願寺下ル町　八文字屋八左衛門板

内容　五巻を京の巻、大坂の巻、江戸の巻、鄙の巻、湊の巻とし、島原、新町、吉原、伏見、大津、奈良、堺、播州、下關、長崎の各遊里につき、各巻先づ遊女の名寄を掲げ、次に其の地に關する遊女を中心とした小話を載せてゐる　八文字屋浮世草子の最初のものとして注目すべきである。西鶴の好色本と同じく、遊里の内幕を描寫したものである。文章は西鶴の奇警さ、鋭さを缺くが、語格整ひ穩和流暢で、秩序整然首尾とゝのひ、西鶴の如く風俗習慣を描くよりも、人情をうつすこと精密である。その點で大に時好に投じたものであらう、なほ本書が名寄を掲げ、横本の形であるなど役者評判記の奪胎であることを示してゐる

圖錄　(50) 京の巻四丁表　(51) 湊の巻最後の丁、刊記は再版のなり埋木して改めたものだらう、水谷不倒氏によれば元祿十四年八月の刊行だといふが、今その刊記ある初版本を見る事が出來なかつた　(52) 京の巻二十八丁表「花さき實のる玉の輿」の條の挿繪。東の大盡が太夫花咲となじむ書

二、風流曲三味線 (Furyū Kyokujamisen)

作者　八文字屋自笑（實際の作者は江島其磧）

體裁　横本六冊

出版　寶永二年（從來の說では寶永七年となつて居るが二年出版とすべき證がある）京麩屋町誓願寺下ル町　八文字屋八左衛門板

内容　浮世の隙を空樽といふ大盡が、洛西双ヶ岡の草庵を訪れ、そこの老翁老婆に好色物語を聞くといふ發端で、六巻を通じて大體二つの物語を中心として諸國の好色の話を描いたものである。先づ持丸長入の息子藤内、手代城兵衛、入聟和甚を中心として樣々の戀の葛藤や、敵討の話を記し、第三巻の半ばから以後は淀屋辰五郎の一件をとらへ來つて、佐渡屋竹右衛門と遊女あげまき、竹右衛門の子竹五郎と遊女吾妻の情事を中心に、忠義な手代藤七と惡手代勘兵衛を配して、複雑な物語を描いて居る。色三味線に比して筋の通つた物語である點が特色をなして居る。文章は益々圓熟味をあらはして居る。

圖錄　(53) 第二巻本文の最初　(54) 第二巻四十六丁表「横槌見て樂しむ後家」の條の挿繪、藤内島原の太夫高機と別れを惜む書

三、色道大全 傾城禁短氣 (Keisei Kintanki)

作者　八文字屋自笑（實際の作者は江島其磧）

體裁　横本六冊

出版　寶永八年卯月中旬　八文字屋八左衛門板。文化十二年に再板。

内容　序文に「水薬師の邊に笹の庵を構へ、頭は霜を梳りて殘髪となし、居士衣の袖を仔細らしく、名は粋色居士とつき、不斷は精進鱠、あるにまかせて魚鳥もあまさず、座禪の夢さめては美妾にいざなはれ、留木の薫たえず、佛壇には佛もなくて女の姿繪を掛け、世に有難き女道門をあまねく說き廣めて、衆道門の窮屈なる物堅き宗旨を破し、老若共に女の道に赴かせんと草庵を出で、洛東水邊衆道盛の場に於て一七日の說法は何と有難い事ではないか」とある如く、說教談義の體裁を借り用ひて、滑稽交りに、或は女道の衆道に勝ることを述べ、或は傾城の短氣をいましめ、或は傾城の客をあやつる手管を教へ、或は遊客の粋となる方法を說き、遊廓は金銀を惜しんでは面白からずといひ、或は女郎は一見不實の如きも誠は深き情のあることを語るなど、遊里好色の表裏の消息を精細に物語つて居る。八文字屋の浮世草子としては傑作と稱すべきものである。

圖錄　(55) 表紙　(56) 第一卷三丁の表　(57) 第一卷五丁の裏「女郎方便の一枚起請」の條の挿繪、粋色居士の說法談等するさま

四、世間息子氣質 (Seken Musukokatagi)

作者　江島其磧

體裁　美濃形大本五冊

出版　正德五年秋　ひしや治兵衛板

内容　題號の示す如く、當時の若者の種々相を描いたもので、一卷に三つづゝ合計十五の息子氣質を描いて居る。冒頭に親苦勞、子樂、孫貧乏の諺を引いて、息子が親の財産をつかひはたす現狀をのべ、息子の惡いは親の教育の惡い故であると說き、それよ

り滑稽交りに樣々の息子氣質、或は法衣屋の息子が軍法に熱中するとか、或は僞心中で親を騙る息子、町人の子ながら醫者や儒者の眞似して勘當さるゝ子息、僧の眞似して果は博奕打となるもの、町人の子の角力狂ひ等を描いてゐるが、氣質物の特色として、類型的、誇張的な描寫が多く、一種のカリカチュア式なものである。西鶴の日本永代藏や武家義理物語なども、一種の町人氣質、武士氣質をうつしたものと見られぬこともないが、それ等よりも一層せまい範圍の氣質を描き、滑稽の中に教訓を寓し人情をうつしてゐる點が、其磧の氣質物の特色である。本書は氣質物の魁で、世間娘氣質、浮世親仁氣質、世間手代氣質等相次いで出版された。

圖　錄　(58) 第一卷序の裏と一丁表目錄　(59) 第三卷二十丁裏と二十一丁表、「勘略は世帶藥きゝ過た始末形氣」の條の挿繪

五、御伽名題紙子 (Otogi Nadai-kamiko)

作　者　江島其磧

體　裁　半紙形本六冊

出　版　元文三年正月　京寺町松原上ル町　菊屋七郎兵衛板

內　容　其磧序に、「正眞の普賢菩薩にもせよ、江口の妓美は若き男子共の爲には仇なる遊君の戯れを始め置れしより以來、諸國その所々の遊女にほだされ、身代を潰し樣々難義にあへる人、その數限なし……ただ恐るべく愼むべきは此の遊興、世の血氣なる若人の異見の種に、上手役者の狂言にせし名題の男どもを集めて、親父達の敎訓の足代とするものならし」とある如く、當時の名優の演じた好色男の物語を收めたものである。卷一は小倉屋源兵衛と遊女吉野、卷二は椀久と松山のこと、卷三は萬屋助六と遊女揚卷、卷四は山崎與次兵衛と遊女吾妻、卷五は松崎・丸市の兩人と遊女花咲、卷六は藤屋伊左衛門と遊女夕霧の事を描いたものである。何れも金滿家の大盡が紙子一枚の境涯に落ちぶれるまでの徑路を、滑稽交りに敎訓を寓しつゝ寫して居る。

圖　錄　(60) 第一卷三丁の表本文の最初　(61) 第二卷五丁の裏と六丁の表、「大臣をそゝりに揚屋の正月事は若水上の大さわぎ」の條の挿繪、椀久が卯月半に正月事して贅を盡し遊興する所

六、鎌倉諸藝袖日記 (Kamakura Shogeisodenikki)

作者　八文字屋自笑・其笑合作（實際の作者は多田南嶺といふ）

體裁　美濃形大本　五冊

出版　寛保三年正月　麸屋町誓願寺下ル町　八文字屋八左衛門板

内容　題名は淨瑠璃の鎌倉袖日記を借つたものであるが、内容は全く異つて、鎌倉將軍賴朝の御前に、土肥實平、朝比奈三郎、北條時政、和田義盛等の宿將が集まり、各々一條づゝ滑稽談を物語るといふ趣向になつて居る。この趣向は八會記などから得たものであらうといふ。一卷三つづゝ、合計十五の小話から成り、何れも一藝にすぐれた者どもが、奇癖を有して失敗する笑話である。

本書は從來の八文字屋本に比して頗る異色がある。從來のものにも滑稽の味はひはあるが、其積などは人情の機微を描くことを主としてゐたものである。しかるに本書は其の文章叙述の滑稽を以て人を笑はせることを主として、人情の穿ちをねらはない所に特色がある。これが又時好に投じて、大系圖蝦夷話や、教訓我儘育等の類似の作が世に行はれた。

圖録　(62) 第三卷四丁裏と五丁表「比丘の五百戒は芝居の看板」の條の挿繪　(63) 第五卷最後の丁

赤本・黑本・青本

赤本・黑本・青本は何れも江戸に於ける文學である、これと次に現はれる合巻を合して、草双紙と呼ばれる、赤・黑・青・黃は、其の表紙の色から出た名である。體裁は半紙二つ切りの紙に印刷したもので、一册五枚と定まつて居る

赤本の前身は所謂行成本で、唐紙表紙の繪本であつたが、その表紙が丹表紙となつたのが赤本である。小兒玩弄の繪本で、繪解きの詞が入つたもの、内容は桃太郎やかち〳〵山や金平淨瑠璃などを、畫本に仕立てたものである。この表紙が享保の頃から黑表紙に變り出したものを黑本といふ。内容は赤本式のものゝ他に、軍記物、敵討物、妖怪物等が加はつたが、依然として婦女幼童のもてあそびものであつた。寶曆の頃に到つて表紙に薄萠黃色を用ひそめてから青本の名がはじまり、それが青みのすくない黃色表紙となつて黃表紙の名が起つた。今日ではすべて褪色して黃に見えるが、表紙の折込などにたまに青みを存するものがある。そして德川時代には黃表紙をも青本といふ名で呼びならはして居たのである。

草双紙の發達に、赤黑本時代、黃表紙時代、合巻時代の三段が見られる。赤黑本に就いては前にのべた。所が安永四年戀川春町の金々先生榮花夢から、其の内容に當世の洒落が加はり、滑稽諧謔の味が中心となつて、大人の慰みの讀物となる傾向が開かれた。この作は青本發達上に一線を劃したものである。この傾向は急劇に發達して、安永天明時代は洒落と滑稽と時事諷刺とが中心となり、輕快奇警を縱横に發揮するものとなつた。寛政に入つて作風亦一變して教訓物となつた。京傳の心學早染草がその魁である。これは松平定信の風紀振肅の結果である　かくて黃表紙は洒落を失つて、再び以前の物語的なものとなり、寛政七年の頃から、敵討物の流行となつたのである。

黃表紙の作者として有名なのは、戀川春町、朋誠堂喜三二、市場通笑、芝全交、唐來三和、山東京傳、式亭三馬などである。これ等作者の輕妙な文と、繪の面白さと相俟つて、一時の流行をなしたが、遂に續き物の合巻に壓倒されてしまつた。

一、日待のとぎ　とんさく新地口 (Tonsaku Shinjiguchi)

作者　未　詳

體裁　一　册（五葉）（赤　本）

出版　己の年（寛延二年か寶暦十一年かであらう）　通油町　村田屋治郎兵衛板

内容　題名の示すやうに、地口の頓作をあつめたもので、四十の地口を出し、それに各々畫を入れたものである。地口は謠曲、古歌等のもぢりから、諺、人名のもぢりなどまであるが、そのもぢりの畫が頗る面白い。赤本として一寸珍らしいものである。

圖錄　(64) 表　紙　(65) 三丁裏と四丁表、雀の千聲、舟なしぞ思ふ、長々の涙人等の地口

二、今様女景清 (Imayō Onnakagekiyo)

作者　柳川桂子作　鳥居清經畫

體裁　三　册（黑　本）

出版　安永五年　通油町　鶴屋喜右衛門板

内容　蝦蟇の妖術を使ふ越中前司盛俊、日向の勾當を裝ふ惡七兵衛景清の兩人が、賴朝をつけねらふ話にはじまり、景清が岩永や梶原に見あらはされ、盛俊の妖術で遁れると、景清の妻の阿古屋と人丸が岩永に捕はれ、畠山重忠の琴責めとなり、梶原の阿古屋への横戀慕から阿古屋親子入牢となる。危き所へ、清水觀音示現ましまして、親子を救ひ給ひ、二人は重忠の情にて許され、景清は梶原を殺し、賴朝の衣を豫讓もどきに切り裂く。盛俊は江馬小四郎に捕はれるといふ筋で、荒唐な物語で、よく黑本といふものゝ性質を示してゐる。

圖錄　(66) 表　紙　(67) 第三册二丁裏と三丁表、清水觀音の利益で牢が自ら破れて人丸は助かり、殺さうとした岩永は兩眼潰れ、梶原大きに驚いてゐる圖

三、金々先生榮花夢 (Kinkinsensei Eigwa no yume)

作者　戀川春町（作竝に畫）
體裁　二　册
出版　安永四年　江戸大傳馬三丁目　鱗形屋孫兵衛
內容　片田舍の金村屋金兵衛が江戸へ出て志を立てようと、目黑不動までたどり着き、其處の粟餅屋に入り、餅の出來あがるまで轉寢をして居る中に、夢に、和泉屋清三といふ金滿家の養子に貰はれ、それより奢り出して、吉原や深川で大盡遊びを極め、次第に手元不如意となり、品川にみすぼらしい姿を示すやうになり、遂に清三の怒にふれて追出され、途方に暮れて目覺めると、漸く粟餅の出來上つた所であつたといふ。廬生の邯鄲の夢をもぢつた作であるが、すべて當世風の寫實とし、今樣の洒落をつくすといふ所に、青本發達史上に一線を劃した新しい味がある。
「うつちやつて置け煤拂に出よう」とか「イキマカニイケクコカクラマコチケナコトイキツケテクコンケナ」など、當時流行の通言やはさみ詞など挿んでゐるのも面白い。
圖錄　(68) 上卷表紙　(69) 一丁の表、自序　(70) 二丁の裏、金兵衛が粟餅屋の奧座敷で一睡してゐる圖

四、夫は楠木是は噓氣 楠無益委記 (Kusunoki Mudaiki)

作者　戀川春町（作竝に畫）
體裁　三　册
出版　安永八年
內容　「長生見度記」・「夫從以來記」とゝもに三未來記と稱せられ、此書その先驅をなしたものである。題名は楠未來記の洒落。極端な想像に滑稽を交へて、未來の有樣を畫いたもので、大通の羽織は三尺八寸五分、ひもは踵へとゞき、四ッ手籠のかはりに四

ッ手車出來、地震で搖つて雷地の底で鳴り、ばら桑歳萬樂と唱へるなど、洒落てゐる。「坊主天下はれて女郎を買ひ俗はかへつて陰馬を買ふ」「新惡原を開いて男郎を出す、やりてばゝァはもらひてぢゝイとなり禿をぷろかと呼ぶ」「江戸節もまだ〳〵ひくしと高くとまつて神樂催馬樂を諷ふ。(何だか御法事にあふやうであります)(イヨ〳〵眠いと申します)」「陰馬の切見世出來る、年の寄つたをはげまと呼ぶ。(これよつていきなはれ)(よつても大師なけれど、まだ弘法へ行く處がある)」等頗る人を喰つた面白さである。

圖錄 (71) 八丁裏と九丁の表　(72) 三丁裏と四丁表

五、鸚鵡返文武二道 (Ōmugaeshi Bumbu no futamichi)

作者　戀川春町作　北尾政美畫

體裁　三冊

出版　天明九年　江戸通油町　蔦屋重三郎板

內容　天明八年朋誠堂喜三二作の文武二道萬石通が非常な大流行であつたゝめ、同じく松平樂翁公の新政を諧謔的に諷した趣向を以て、萬石通の後篇とも見るべき作としたものである。題名も文武二道の鸚鵡返しの意である。

話の筋は、延喜の帝が臣下の奢侈を直さうと思はれ、身を以て範を示さんと茶字縞やさんとめ縞の衣を召され(樂翁公に擬してゐる)、政事は菅秀才に、武術は義家、爲朝に、馬術は小栗判官に命じて臣下を敎へさせる。俄に風儀變り、公家も木刀の千人打や、冑に見たてゝ茶碗屋の鉢を射たりなどし、馬術の稽古といつては芳町のかげ馬に乘り、遂には往來の女房にまで乘るといふ頗る滑稽脫線。そこで文事をすゝめ大江廣元を召して九官鳥の詞を敎へしめる。文武揃ひし御代となつて鳳凰が來儀するといふ頗る滑稽な時勢諷刺の漫畫的な作である。

圖錄 (73) 中卷表紙　(74) 十三丁裏と十四丁表、延喜の聖主菅公の賢臣房の大儒合體して學を勸めたので、上下文を心がける畫

六、大極上請合賣 心學早染草 (Shingaku Hayazomegusa)

作者　山東京傳作　北尾政美畫

體裁　三　冊

出版　寛政二年　江戸大傳馬町　大和田出店板

内容　一編の趣向は、人には善魂惡魂があつて、善惡の所業をさせる。しかも人が本心にある間は善魂よく惡魂を制するが、本心を失ふと惡魂が勢力をふるふ。故に人たる者は心を正しうして惡魂に乘ぜられぬやうにせよとの理を、善玉惡玉の繪姿に面白く書きあらはしたもので、當時流行の心學によつたものである。作者は序に「繪双紙は理屈臭きを嫌ふといへども、今その理屈くさきをもて一趣向となし、三冊に述べて幼童に授く」といつてゐる如く、教訓的勸懲的な立場に立つて、從來の黄表紙以外に一新風をたてたものである。話の筋は、目前屋理兵衛の一子理太郎が晝寢の間に、惡玉が善玉を追出し、それより理太郎の女郎狂ひとなり、果は家尻切りや追剝にまでなる處を、道理先生に教誡せられて本心に立かへるといふので、道理先生は當時茅場町に心學の講筵を開いた中澤道二翁をもぢつたものである。

圖録　(75) 下卷表紙　(76) 五丁裏と十丁表、理太郎惡玉に誘はれて吉原に遊び、夜半目ざめて後悔し家に歸らうとする時、惡玉はこれを引止め善玉は家につれて歸らうと引張り合ふ畫

七、又燒直鉢冠姫 稗史億説年代記 (Kusazōshi Kojitsuke Nendaiki)

作者　式亭三馬（作並に畫）

體裁　三　冊

出版　享和三年　江戸本材木町　西宮新六板

内容　草双紙の年代を示すことを中心として、三馬自ら諸家の繪を摸し、又文章の調子をも傳へて示したものである。全篇の趣向

はお伽草子以來人口に膾炙してゐる鉢冠姫の物語をとり、それを各丁、順次に古代の作家から當代の作家へと、其の畫風作風を摸して書いたものである。それと共に草双紙の知識に資すべきもの、例へば地本問屋目印、戯作者名寄、倭畫師の名盡、名作靑本略記として二十三部の傑作をあげなどしてゐる。この作は天明三年の草双紙年代記(岸田杜芳作)の影響をうけ、それに倣つて一工夫こらしたものであつて、「又燒直」はその意を示したものと思はれる。草双紙の變遷を一目の下にわかる樣に工夫した所、參考とすべきものが多い。

圖録

(77) 十四丁裏と十五丁表、右は春英左は紅翠齋の畫風を摸したので寛政末から享和初年の作風

(78) 三丁裏と四丁表、菱川吉兵衛の畫風竝に當時の作風を摸したもの

洒落本

洒落本は寶暦頃から行はれて、化政度に専ら流行した遊里文學の生粋であつて、その特色は吉原や深川のやうな色里の狀況を寫實的に描破し、又こゝに遊ぶ人々の風俗心理を鋭く穿つた點にある。全文が狂言本式の會話體に書かれてゐることゝ、體裁がいづれも小本で、中には雅致ある唐本仕立のものが多く、序跋共に洒落氣と衒學的臭味あることもその特徴である世に蒟蒻本の稱あるのもその形が類似してゐるからである。

かうした片々たる文學は、すべて浮薄な時代の波に動いた粋士墨客の遊戯氣分から生れたもので、文學上第一義の價値は認められないが、その純然たる寫眞の筆致と、犀利な觀察の眼の上に唯一（ユニーク）なものが存する。もと江戸に行はれた歌舞伎臺帳の拔書小本に摸したものだといはれてゐるが、その樣式にどことなく臺帳の匂ひがする。

この起源は寶暦六年大阪に聖遊廓が出で、江戸に異素六帖が現れたのを嚆矢とするが、それ以前にも享保十三年に兩巴巵言のやうな同體裁の細見の書物も出てゐるから、强ち卒然として世に行はれたものとは斷定出來ない　兎も角も京阪江戸同時に同樣の作物が出たのであるが、すでに東漸しつゝあつた德川文學の趨勢と、今一つはかうして諷刺と洒落とを生命とする文學内容が、江戸人の性格に觸れる點が多い故か、遂に東都の地に繚亂の美を呈したのである。殊に山東京傳の奇才は洒落本の世界に自在無碍の活躍を示したが、寛政三年の禁令はこれらの輕佻な内容を嚴重に封鎖したので作者も作品も共に凋落し、寸鐵人を刺す潑剌たる筆も、方向を轉じて教訓人情を旨とする平板な續き物と化し去り、後に來る爲永春水一派の人情本を胚胎するやうになつたのである。

一、泉臺冶情 (Sentaiyajō)

作者　樗故齋
體裁、小本一册
出版　不詳

内容　これは上方の洒落本で、寛延二年大晦日の序がついてゐる。俳優中村松江が病死して、冥土からこの世の顧客へ送る手紙の文章になつてゐる。閻魔王が松江との別れに、名殘を惜んで愁歎にくれたり、阿彌陀が金色の顔におしろいをぬり、蓮葉染の道服姿で現れたりする趣向は頗る奇抜である。地獄めぐりの趣向は西鶴の小夜嵐などの作意によつたのであらうが、これは滑稽な漢詩、和歌、俳句を交へて多少の寓意も覗はれる。

普通洒落本の鼻祖とよばるゝ「聖遊廓」（寶曆六）は、この書の趣向に暗示を得てゐることは明かで、ともかくも粋書の發祥地は上方に求めなくてはならぬやうである。

作者樗故齋は何人かわからぬ。

圖錄　(79)序　文　(80)發端第一丁

二、異素六帖 (Isorokujō)

作者　中氏嬉齋

體裁　小　本　二　冊

出版　寶曆六年正月板

内容　江戸洒落本の濫觴として有名なものである。名題は義楚六帖のもぢりであつて、上卷に儒者、歌學者、佛者の色道論をのせてゐる點は、同年六月に出た上方の聖遊廓に類するが、趣向筆意共に後者ほどの妙味はない。下卷は「太夫の揚屋入」「工面のあしき女中」などいふ項目のもとに、一々挿畫をのせ輕妙な短評を加へてゐる。例へば、「俄に客のへつた女郎」と題して、空山不見人、但聞人語響、と王維の詩句を書き、更に「あまりてなどか人のこひしき」といふ歌句を添へてゐる。

作者中氏嬉齋は書家澤田東江のことだと蜀山人が麓の塵にしるしてゐる。序者無々道人とあるのも同人である。

圖錄　(81)表　紙　(82)十二丁裏と十三丁表　(83)序　文

三、遊子放言 (Yūshihōgen)

作者　田舎老人多田爺

體裁　小本一冊

出版　不詳

内容　刊行年月は不詳であるが、明和七年頃の作といはれてゐる。著者田舎老人多田爺は、多田屋利兵衛といふ者だと平秩東作の莘夜茗談にしるしてゐる。この粋書が大きに流行したので、後には書肆須原屋市兵衛の手から讓りうけて作者自身が賣出したといふことである。いふまでもなく揚子方言の洒落で、すべてが江戸吉原の寫生である。中の町、夜のけしき、宵のほど　更ての體、しのゝめ頃、といふ見出しがついてゐる。當時流行の自稱通人の嫌味な樣子を描破して、諷刺の意を、どこまでも寫實風な會話で利かせてゐるあたりは、後世洒落本の典型のやうに推賞されるのも强ち無理ではない。

圖錄　(84) 序文　(85) 本文

四、穿當珍話 (Sentochinwa)

作者　不詳

體裁　小本一冊

出版　寶曆七年　書林　汲古堂、滄浪亭、文英堂とあり。

内容　これは上方の洒落本で寶曆七年正月の板行で、有名なる聖遊廓の翌年世に出た譯である。素より明の小說剪燈新話によつた名稱であるが、三馬の船頭深話よりも遙に先立つてゐる。序に八幡大名又は黑白主人の名が見えるが何人かわからない。文章はすべて京阪の柔らかな會話體で、語呂、口合の先生のところへ弟子が集つて口合の稽古をするといふ筋になつてゐる。「論語徵

（老少）不定の世のならひ」「隠元（綸言）汗の如し」などいふ衒學的なるものも交つてゐる。並木正三が芝居ではやらせたトコキノヤノハノモノといふ寶暦三年の疫病の呪文が載つてゐるのが目につく。この書比言（クチアヒ）指南と題したものもある

圖録　(86)表紙　(87)序文　(88)最後の二十一丁裏と奥附

五、世説新語茶 (Sesetsu Shingoza)

作者　大田南畝

體裁　小本一冊

出版　不詳

内容　世説新語補をもぢつた唐本じたての小冊で、新語茶は新五左との音通である　安永の板本で、江戸上野山下、深川、音羽、谷中いろはの遊里の諸相を描いたもので、登場人物も田舎武士、坊主客などそれ〴〵に地方色を配してゐる。序に「今山の手の馬鹿人が著すところの一篇は南鐐一片にまさること遠し」云々と書いてゐる。馬鹿人は蜀山人大田南畝の匿名なることはすでに論定せられてゐる。

圖録　(89)見返と序文　(90)本文の最初變語の條の開一丁　(91)坊客の條の開一丁

六、仕懸文庫 (Shikake-bunko)

作者　山東京傳

體裁　中形本一冊

出版　寛政三年　江戸蔦屋重三郎板

内容　大礒風俗と銘うつて有司の眼をごまかし、文治長久の昔と筆をおろしてゐるが、讀みもてゆくと、曾我十郎も、朝比奈も、悉く文化文政の通り者や遊び人である。「青砥屋にて藤綱さままゐる」といつた文句が至るところに出て來る。

「しかし文庫といふは子どもの着換をいれてもたせて來る文庫なり。大礒にも着物をしかけといふ」とあるので外題の由來がわかる

寛政三年の出版で、その爲に京傳は厄に遭ひ、作者としての方向を敎訓讀本の方へ轉じたのである。

體裁は中本に近い大形な洒落本で、形の上にも過渡期の姿を示してゐる。

圖録 (92) 表紙見返し　93) 本文最初の開一丁

七、娼妓絹籭 (Shōgikinuburui)

作者 山東京傳

體裁 小本一冊

出版 寛政三年 江戸蔦重板

内容 これは京傳が幕府の忌諱に觸れ、手鎖五十日の刑をうけた洒落本で、仕懸文庫、錦の裏と同じく寛政三年の出版である。娼妓を將棊に洒落れたところが趣向であるが、筋を梅川忠兵衛に採り、大阪新町をそのまゝ吉原もどきに、作者一流の筆意でやつてゐる。近松の作品とは關係なく、只身重になつた梅川が忠兵衛と二の口村へ駈落するといつた程のものであるが、會話にはすでに人情本式の甘いところが現れてゐる。最後に「筆のゆくまゝかきつゞり、色情に身を謬るともがらの、すこしは戒ともならんと蔦の唐丸がもとめにまかせ」、云々、と敎訓の二字にかくれてゐるところが皮肉である

圖録 (94) 表紙題簽　(95) 目録及發端　(96) 挿畫

八、猫謝羅子 (Nekojarashi)

作者 正德馬鹿輔

體裁 小本一冊

出版　不　詳

內容　これは本所猫茶屋の世界を穿つた洒落本で、未の春とあるのは寛政十一年の板本と思はれる。序に馬琴門人くわいらいしと署してゐる點から、馬琴の戯作であらうとの説もあるが、一名正徳馬鹿輔は狂歌師東西菴南北の匿名である。南北は朝倉藤八とよぶ剞劂師である　挿畫も正徳畫としてゐるから自畫であらう。この頃は馬琴も作家として既に相當の著作も出してゐるから、曲亭門人の語も強ち不自然ではない。本所の色茶屋通ひの粋容や半可通を點出して何の趣向らしいものもない寫生である。

圖錄　(97) 序の六丁目開　(98) 序　文　(99) 本文發端

九、家滿安樂志 (Yamaarashi)

作者　柳亭種彦

體裁　小本一冊

出版　不　詳

內容　山あらしは柳亭種彦の唯一の洒落本で　たつの春とあるから文化五年の作と認められる。表に山あらしの看板を掲げて、內には猪一蹄をつなぐ見世物はこれこの册子の如しと作者は卑下してゐる。趣向はすべて草双紙風で、奇抜な觀察もないが、和漢の故事をつらねた凝つた書き出しと、茶屋の段、かこはれの段、淨るり菜葉蝶と三段に書き分けた正本製（じたて）の趣向とは、よくこの作者の氣質や好みを現はしてゐる。

終りに「この小册お氣に入り書房の米匣をうるほさば、後篇はいかなるこゝや書く。こゝで仕舞ふがナツレ狂言の山おろし」とある通り、筋は完結してゐない。

圖錄　(100) 表紙題簽　(101) 發端

讀本

元祿享保頃の小說は、大抵近代の俗語を用ひて、現實の人間や社會の寫生を、試みたものであるから、當時の漢學や國學とは、殆ど沒交涉であつた。また漢學や國學の方でも、小說の內容や文體の方面にまで、甚大なる感化を及ぼす程には、その硏究が進步して居なかつた。然るに寶曆明和頃、八文字屋本が衰へてからの上方小說は、著しく兩者の影響を受け、漢文直譯體や雅文擬古體の文章で以て歷史的浪漫的事件を取扱ふ樣になつた。

從來の漢學者は主として修身齊家とか、經世濟民とか云ふ實際的方面のみを尊重し、詩文小說の如き純文學は、之を輕視する風があつた。所が荻生徂徠や伊藤東涯等は、經術を說くと共に、また詩文をも講じた。徂徠の門には、學說道德を論議するよりは、寧ろ詩酒風流を娛しむといつた風の服部南郭が居り、東涯の門には、支那の稗史小說の類を、新たに硏究する人々が居つた。かくて寶曆明和の頃からは、經學を離れて純粹の支那文學に親しむ者が、漸く多くなつて來た。「通俗忠義水滸傳」「小說讀法」の著者岡島冠山、「小說精言」「小說奇言」の編者岡白駒等がそれである。此の風潮に刺戟されて、「英草紙」「繁夜話」「莠句册」の著者近路行者が出たのである。近路行者は支那の「剪燈新話」「今古奇觀」などに暗示を得、遒勁なる漢文句調で以て、好んで南北朝頃の歷史的人物や、浪漫的架空的事件を描き、所謂讀本の基を開いた。その小說は內容も形式も共に支那的であるが、次の上田秋成と建部綾足は、之に國文の軟か味を加へて、和漢雅俗折衷體とも云ふべき、後の讀本の文體を創始した。

國文學者で初めて小說を書いたのは、「白猿物語」「落合物語」の著者荷田在滿である。建部綾足は寶曆十三年、平賀源內と共に眞淵の門に入り、その復古主義を小說に適用して、明和五年に「西山物語」を書き、次いで「本朝水滸傳」を書いたのである。「雨月物語」「春雨物語」「癇癖談」の著者上田秋成も、眞淵に私淑し、綾足の紹介によつて、眞淵の門人加藤宇萬伎に就いて、國學を修め、晚年は小說を放擲して、專ら國學の硏究に耽つた程である。

兎に角以上述べ來つた近路行者・上田秋成・建部綾足の三人は、或は支那文學或は國文學の影響のもとに、讀本と稱する一種の小說を創めたのである。元來讀本とは繪本に對する名稱で、廣義に解すれば假名草紙も、浮世草紙も、八文字屋本も包含さるべき筈である

が、普通は右の如く、狹い意味に用ひられる。

秋成・綾足以後暫らく讀本は雌伏する。

上方では優秀な作家が居なかつたからであり、江戸では新興の黄表紙・洒落本に、壓倒されたからである。ところが松平定信が、寛政の改革を斷行するに及んで、時事を諷し、風教を紊る黄表紙・洒落本が禁止せられ、作者や版元が多く罰せられた事が、江戸小說界に。再び讀本が進出する動機となつたのである。黄表紙・洒落本界の寵兒山東京傳が、寛政十年の「忠義水滸傳」を以て、讀本界に復活したのを始め、既に寛政八年の「高尾船字文」を以て、此の方面に將來の飛躍を暗示した曲亭馬琴が、享和三年には「月氷奇縁」を著はし益々健筆を振つて、京傳の壘を衝かんとするあり、斯界は急に色めき出した。京傳は淨瑠璃・歌舞伎から多く材を採り、挿繪その他に意匠を凝して、讀者を釣り、馬琴は支那小說・軍記物等に題材を求め、整然たる結構と堂々たる文章によつて、讀者を引きつけたのである。前者に「復讐奇談安積沼」、「優曇華物語」、「櫻姬全傳曙草紙」、「昔語稻妻表紙」、「梅花氷裂」、「善知鳥安方忠義傳」、「本朝醉菩提」、「双蝶記」等の作があり、後者に「復讐稚枝鳩」、「小夜中山石言遺響」、「椿說弓張月」、「墨田川梅柳新書」、「雲妙間雨夜月」、「賴豪阿闍梨怪鼠傳」、「三七全傳南柯夢」、「松浦佐用媛石魂錄」、「旬傳實々記」、「俊寛僧都島物語」、「夢想兵衛胡蝶物語」、「昔語質屋庫」、「靑砥藤綱摸稜案」、「皿々鄉談」、「八丈綺譚」等の諸作がある。彼一作此一作、互に鎬を削つたのであるが、京傳は終に力及ばず、文化十三年五十一歲を以て死んだ。その後は馬琴の獨壇場であり、「八犬傳」、「巡島記」、「美少年錄」、「俠客傳」等の大作に筆を染め、天保十二年「八犬傳」の完結を以て、その文藝的生涯を終つた。

さて此の江戸讀本の黄金時代は、文化年間であり。文政から天保へかけては、次第に衰微し、弘化以後は全く不振となり、他の小說と共に忘れられて了ふのである。

之を要するに、江戸讀本は、忠孝の觀念、善惡の觀念を人格化した一種の觀念小說である。善人榮え惡人亡ぶといふ道德的因果律を說明した倫理小說であり、勸懲小說である。從つて人物も、極惡か極善かの孰れかであり、善でもなく惡でもない普通の人情を具へた實在の人間は、少しも描かれて居ない。個性描寫とか、性格描寫とかは、之を求める方が間違つて居る。何となれば、それは人生の縮圖としての小說ではなく、作者の倫理觀道德觀を小說的に表現した理想小說であるからである。

事件も餘りに架空的であつて、現實味に乏しいが、それも平氣である　文章も流麗彫琢の妙を極めて居るが、概して古典的で、何等の創意なく、清新の趣致を缺いて居る。けれども卷を重ねる事堂々數十百、しかもそれを、褊狹ではあるが一つの堅い信念によつて貫いて居る點は、實に感嘆に値する。

一、本朝水滸傳 (Honcho Suikoden)

作者　建部綾足

體裁　美濃版九册

出版　安永二年（但し初編十卷だけ。二篇十五卷は寫本）京版

內容　本書は別名を「吉野物語」といひ、發端は柘枝傳說に據り、吉野の里の味稻といふ男が、仙女と契つて百人の子を生み、その子が或は貴人或は英雄となつて、幾年かの後、父母の棲む山に集るといふ筋。水滸は琵琶湖、梁山伯は伊吹山、宋高は惠美押勝高倭は道鏡となつて居る。「水滸傳」飜譯の初は、岡島冠山の「忠義水滸傳」。飜案の初は本書。佐々木天元の「日本水滸傳」、伊丹椿園の「女水滸傳」、京傳の「忠臣水滸傳」、岳亭丘山の「神稻水滸傳」は、孰れも本書の系統を引く。馬琴は本書を推奬して、江戸讀本の嚆矢だと云つた。文章は雅言古語の間に、往々俗言俚語を交へて居るが、それだけに親しみ易く成つて居る

圖錄　(102) 第一册表紙の見返と序　(103) 第一冊の挿繪（味稻と柘枝仙女が、雲に乘つて立去る所）

二、雨月物語 (Ugetsu Monogatari)

作者　上田秋成

體裁　半紙本五册

出版　安永五年夏　京寺町五條梅村判兵衛板

內容　秋成は初め「諸道聽耳世間猿」、「世間妾形氣」など、八文字屋風の小說を書いて居たが、後加藤宇萬伎に就いて國學を修め、

近路行者の「英草紙」に倣つて　雅文體の小說を書いた。それが本書である。時に明和五年。白峰・菊花の約・淺茅が宿・夢應の鯉魚・佛法僧・吉備津の釜・蛇性の淫・靑頭巾・貧福論等。孰れも幽靈怪異の話。浮世草紙や八文字屋本の現實的寫實的なるに較ぶれば、著しく浪漫的神秘的である。その幽玄縹渺として、讀者を夢と現の境に彷徨せしめる點は、眞に古今獨歩である。文章は漢文と國文の妙味をコンデンスし　簡約の裡に意を盡し、玲瓏玉の如きものがある。その藝術的香氣の高い點に於ては、京傳馬琴等の遠く及ぶ所ではない

圖錄　(104) 第三册の表紙　(105) 第一册序の終と本文の始　(106) 白峰の挿繪(崇德院の亡靈と西行法師問答の所)

三、高尾船字文 (Takao Senjimon)

作者　曲亭馬琴。榮松齋長喜畵

體裁　中本　五册

出版　寛政八年

內容　馬琴讀本の初作。半紙本ではない。半紙本は享和三年「月水奇緣」から。併し內容は讀本めいて居る。即ち「千代萩」に「水滸傳」を附會したものである。「水滸傳」に「洪太尉誤走妖魔」とあるのを、「洪氏あやまつて實方の廟をひらく」とし、松島瑞巖寺なる藤原實方の廟から、勇士が出て來る事として居る。支那小說「水滸傳」は上方の讀本は勿論、江戸の黃表紙や洒落本にも、既に飜案されて居るが、之を淨瑠璃風に移したのは、馬琴が最初である。京傳の「忠臣水滸傳」(前編寛政十一年、後編享和元年)は、本書に刺戟されて　出たものであらう。所詮幼稚なものではあるが、馬琴習作時代の讀本として、注目すべきである。

圖錄　(107) 五册目の表紙　(108) 一册目の口繪と本文の始

四、昔話稻妻表紙 (Mukashigatari-inazumabyōshi)

作者　山東京傳。歌川豐國畵

體裁　半紙本五册

出版　文化三年版元　伊賀屋勘右衛門

內容　大和國佐々木判官貞國のお家騷動を骨子とし、それに不破伴左衛門と名古屋山三郎の話、佐々良三八郎と浮世又平の話、軍學者梅津嘉門の話などを、按配したものであるが、人物の出入繁く、事件錯雜し、個々の話に有機的統一なく、且つ餘りに芝居めいて面白くない。畢竟讀本は京傳のものではない。併し挿繪その他に、歌舞伎趣味、錦繪趣味の意匠を凝らし、藝術味豐なものとしたのは、馬琴等のとても及ぶ所ではない。此の點で京傳はもてたのである。文化五年、此の趣向を其儘、大阪芝居の舞臺にかけて好評を博し、同年更に續編「本朝醉菩提」(十册豐國畫)を出した。

圖錄　(109) 第一册序　(110) 第五册の終奥附　(111) 第一册表紙見返

五、南總里見八犬傳 (Nansō Satomi Hakkenden)

作者　曲亭馬琴。畫工　溪齋英泉、初代柳川重信、二代柳川重信

體裁　半紙本(全篇九輯通卷百六册)

出版　自文化十一年春　至天保十二年秋

內容　前後二十八星霜を費して、大成されたもので、日本小說中の最長篇である。筆を嘉吉の役、結城城の沒落、忠臣里見季基の戰死に起し、その子義實が房總二國を經略し、孫義成に至つて、家運愈々繁昌するといふのを、大體の骨子とし、それに所謂里見八犬士を配し、その忠勇義烈を描いて、以て勸善懲惡に資せんとしたものである。人物が概ね超人間的であり、その性格が倫理的に凝固して了つて居る憾はあるが、而も結構雄大、詞藻絢爛、史實精確、脚色自在なる諸點は、その缺を補うて餘りがある。

圖錄　(112) 第二輯卷二の表紙　(113) 第一輯卷一の口繪の一(鯉に乘つて居るのは、里見義實)　(114) 第八輯卷一の本文の始(之は馬琴自筆の稿本)

滑稽本

滑稽本とは膝栗毛・浮世風呂等の如き、滑稽を主とした江戸後期文學の一種を呼ぶ名稱である。しかしこの名稱は江戸時代から存して居たのではなく、當時はその體裁から一般に中本と呼ばれてゐた。即ち是等の書は、普通糊入みよし紙半截で、半紙本と小本との中間の大さであつたからである。然るに實はこの中本の體裁以外のものにも、なほ當時の滑稽文學として見らるべきものは多いので、明治以後是等を總稱して、滑稽本の名目が汎く行はれるやうになつた。

かうした意味の滑稽本は、先づその源を寶曆頃盛んに行はれた所謂談義物に發して居ると言へよう。この談義物中最も古く且つ名高いのは、寶曆二年に刊行された靜觀房好阿の「當世（イマヤウ）下手談義」で、それは警世諷俗の意を面白をかしく書綴つたものであつた。その他「敎訓雜長持」、「錢湯新話」、「滑稽雌黄」等の類、すべて滑稽の筆を行つてはゐるもの丶、志す所は要するに敎訓にあつた。ところが寶曆末年のに頃至つて、風來山人の「根無草」、「志道軒傳」等の如き、漸く敎訓の意を離れて、戯謔を專らとするものを生じ、遂に一九・三馬等の所謂中本が現はれるやうになつたのである。而してなほこの中本へ直接の系統を引くものに洒落本があつた。洒落本は元來遊里岡場所の遊びを寫すのを主としたものであるが、中には萬象亭の「田舍芝居」の如き、全く遊里以外に題材を求めたものもあつた。是等はその內容から言へば、寧ろ滑稽本に屬すべきもので、かの一九・三馬等の作が、努めて寫實的に描かうとし、又會話以外の地の文章を割書にする等の體裁は、全くこの種の洒落本から學び來つたものといふべきである。しかもそれが中本として、一つの獨立した別種の文學と認められるやうになつたのは、やはり享和以後の事であつた。「江戸作者部類」の著者は、この變遷を「洒落本既に一變して浮世物眞似めきたるえせ物語流行す」と言つてゐる。

滑稽本の作家として最も名高いのは、いふまでもなく一九と三馬の二人である。一九は夙く寛政年間から青本などの作を多く出してゐたが、その作家としての名聲を博したのは、享和二年かの膝栗毛の初篇を出してからの事であつた。この書は單に一九の文壇的地位を重からしめたばかりでなく、中本の發達展開史上に一紀元を劃するものであつた。膝栗毛の大人氣を得たのに刺戟されて、京傳・三馬等もまたこの方面に活躍の道を拓かうとした。特に三馬は文化元年「狂言綺語」を出して以來、「酩酊（ナマヨヒ）氣質」、「戯場粋言幕の外」、「小野（ヲノ）

𥦆譃字盡」等の作を相續いて公にし、遂に文化六年「浮世風呂」の作を見るに至つた。この書は當時膝栗毛と名聲相若き、つゞいて二篇・三篇・四篇と續刊され、その間になほ「浮世床」も新たに稿が起された。かくて前者は文化十年に完結し、後者は文化九年に二篇まで出した。その後も彼はなほ「四十八癖」、「一盃綺言」、「古今百馬鹿」、「人心覗機關」、「大千世界樂屋探」等の作に滑稽の趣向を凝らし、文政五年正月年四十七で歿した。丁度その年には一九が嚮に膝栗毛完結後、更に稿を起した「續膝栗毛」の十二篇が滿尾して、享和二年以來二十一年間好評をつゞけた作に、一と先づ筆を擱いたのであつた。一九は膝栗毛正續篇の出版されてゐる間も、なほその他の戯作に筆を執り、その滿了後も天保二年歿するに至るまで、二三の作を出して居り、特に又「續々膝栗毛」の稿を思ひ立つてその二篇まで出版された。かうして一九が一生の間に著はした中本の數は頗る多いが、趣向は屢々くり返して踏襲され、實は膝栗毛以外に見るべきものはあまり多くなかつた。

一九・三馬の後、瀧亭鯉丈・梅亭金鵞等が中本作者として知られて居る。鯉丈の著では「花暦八笑人」と「滑稽和合人」が最も名高く、又三馬の浮世床二編の後をついで、その三篇をも著はした。金鵞はやゝ遅れて出で、安政四年に「妙竹林話七偏人」の作を出してから世に名を知られた。彼等の作には茶番の趣向が頗る多く、そこに天保以後の爛熟に過ぎた太平氣分が見られて、些か時代の影を反映するものとして、一九・三馬以外の境地を拓いては居るが、要するに滑稽本の全盛時代は文化文政の間にあつたので、天保以後は同じ中本形の人情本に益々頽廢氣分を濃厚にして行つた。

一、根南志具佐 (Nenashigusa)

作者　天竺浪人（平賀源内）

體裁　半紙本十冊

出版　前篇寶暦十三年、後篇明和六年、江戸　岡本利兵衛板

内容　俳優荻野八重桐の溺死一件を脚色したもので、閻魔王が瀬川菊之丞の繪姿を見てその美色を愛し、水虎に命じてこれを地獄に拉して來させようとする。そこで八重桐が菊之丞の身代りに入水する事で前篇は終り、後篇はその續き物語として、市川雷蔵

と坂東彦三郎の死を趣向の種としてゐる。その題號は當時辻談義で名高かつた深井志道軒の著「元無草」の名を利用したのである。時事をとつてこれに架空の想像を加へ、滑稽化するのは、源内の最も得意とする所であつたが、本書の如きはその代表的なものであらう。特に前篇は彼の奇才が最もよく發揮され、出版當時三千部を賣盡したと傳へられてゐる位である。

圖　錄　(115) 前篇五之卷中の挿繪　(116) 前篇一之卷本文一丁表

二、針の供養 (Hari no kuyō)

作　者　畠中銅脈

體　裁　半紙本五册

出　版　安永三年

內　容　閻魔王が色に浮れて失敗し、冥途の住居も成り難くなつて、娑婆へかせぎに來るといふ筋で、風來の「根無草」などから趣向を得たものであらう。しかしこれは女色を主としたもので、且つ黃表紙や洒落本風の傾向を多く帶びて居る。銅脈は狂詩作家として汎く知られてゐるが、本書や「風俗三石士」の如き作もあり、上方に於ける滑稽本の作者としても、亦注目すべきである。

圖　錄　(117) 序文二丁裏と本文一丁表　(118) 卷之一五丁裏と六丁表挿繪

三、古朽木 (Furukuchiki)

作　者　朋誠堂喜三二

體　裁　半紙本五册

出　版　安永九年正月　江戸　西村傳兵衛板

內　容　秩父屋與九郎の子八十八と山川桃右衛門の女お犬との婚約から、八十八の思はく買の失敗、桃右衛門の家來黍藏の惡事等を仕組み、最後は地藏菩薩の靈驗にひきつけて目出度く結んでゐる。その間桃太郎・かち／＼山・花咲爺等のお伽噺をからませ、

當世の風俗流行等を取入れてゐる點は、全く黄表紙風な行き方である　しかし全篇に亘つて敎訓的な態度を取り、殊にその巻二の如きは、「下手談義」の巻二の趣向をそのまゝ假り用ひて居る程で、すべて談義物から滑稽本に移つて移つて行つた變遷のあとを、最もよく見る事が出來る。但し作者は勿論黄表紙がその本領であつたので、この書の如きは寧ろ不成功の作であらう。出版當時も不評判で、僅かに三四十部しか賣れなかつたと、「江戸作者部類」には傳へてゐる

圖　錄　(119) 見返と序文一丁表　(120) 五丁裏と六丁表に亘る春町の自畵

四、田　舍　芝　居 (Inaka-shibai)

作　者　萬　象　亭 (森島中良)

體　裁　小　本　一　册 (享和版は半紙本四册)

出　版　天　明　七　年 (享和元年再版)

內　容　越後の片田舍を舞臺として、そこで催された田舍芝居のをかしみをねらつた作である。洒落本の寫實的な描寫法を、遊里岡場所以外に用ひて、一生面を拓いたもので、これがやがて洒落本から所謂中本と稱する滑稽本を派生すべき緒を開いたのであつた。この書はその新しい試みの爲に、當時も評判がよかつたものと見えて、享和元年に京都で再版され、天保の外題がへ翻刻本もあり、又三馬の「田舍芝居忠臣藏」、「狂言田舍操」等をはじめ、その趣向を踏襲した滑稽本も多かつた

圖　錄　(121) 後序ほめ言葉開き一丁　(122) 序　開　(123) 再版本奥附

五、道　中　膝　栗　毛 (Dōchū Hizakurige)

作　者　十返舍一九

體　裁　中　本　十六册 (文久版は二十四册)

出　版　享和二年——文化六年 (文久二年版其他後刷が多い)

内容　一九が中本作者としての地位は、本書によつて定まつたといふべきその代表作である。彼がこの書の初篇を出したのは享和二年で、江戸の村田屋治郎兵衛を板元とした。然るに豫想外の好評を得て、翌年直ちに後篇二册を出し、爾來三篇・四篇と相ついで出版され、文化六年八篇に至つて終つた。しかも讀者はなほこれに倦かず、摸倣の書も色々あらはれたので、一九は更に續膝栗毛の稿を起して、文化七年その初篇を出し、年々これを書きついだ。その間に文化十一年には「東海道中膝栗毛發端」を出して、主人公彌次郎兵衛・北八二人の素性を書き加へた。かくて膝栗毛の正篇は全部出來上つたのである。本書は汎く行はれたゝめ後刷本が甚だ多いが、特に文久二年には序の大部分や附言・凡例等を除き、また挿繪も全部かきかへ、内題も「滑稽五十三驛」と改めて、全體を十篇二十四册にして出版した。殘存して居るものはこの十篇本が最も多い。

圖錄　(124) 初篇序文　(125) 初篇口繪と本文一丁表

六、奇妙圖彙 (Kimyōzui)

作者　山東京傳

體裁　小本一册

出版　享和三年正月　江戸　須原屋市兵衛板

内容　安永・天明以來盛んに流行した手拭合・浴衣合・小口合等の見立てやこじつけは、滑稽本の趣向にも及んで、この種の見立て圖を生んだ。特に機を見るに敏な京傳は、早速新造圖彙・小紋新法・小紋雅話等を出して、この流行にあて込んだ。本書もその一種で、文字を以てその文字の現はす繪を描いたものである。勿論それはヘマムシ入道や山水天狗等から思ひついたもので、自らも是等を古法として卷頭に揭げてある位だが、京傳の趣向は所謂古法に比して頗る巧みに出來て居り、又文字ばかりでなく松位(寫眞參照)のやうに、簡單な繪で他の形をあらはしたものもある。繪に添へた詞書もまた輕妙で氣がきいて居る

圖錄　(126) 見返と本文二丁表　(127) 十丁裏と十一丁表　(128) 十八丁裏と十九丁表

七、浮世風呂（Ukiyoburo）

作者　式亭三馬

體裁　中本九册

出版　文化六年―同十年

內容　三馬の滑稽本中浮世床と共に、最も代表的なものとして知られて居る。全體四篇から成り、初篇には男湯、二・三篇には女湯、四篇には又男湯のさまを記して居る。その趣向はもと寶暦四年刊の「銭湯新話」や享和二年刊の「賢愚湊銭湯新話」（京傳作）等から得たものであらうが、その日常茶飯の事によつて、各人物の特徴を巧みに描き分ける寫實的な筆致は、全く三馬獨特のものといふべきである。江戸作者部類によれば、この書初篇出づるや、評判がその年第一で、遂に四篇まで續出し、なほ看官飽かずとて浮世床の刊行を見るに至つたといふ。當時から三馬の傑作として、世に迎へられたさまが知られる。

圖錄　(129) 初篇の見返と序文一丁表　(130) 初篇の口繪　(131) 三編表紙と題簽

八、風俗三石士（Fūzoku Sangokushi）

作者　畠中銅脈

體裁　小本二册

出版　弘化元年冬　江戸　丁子屋平兵衛等板

內容　貧乏でその癖茶屋遊びの好きな三人の公家侍が、川原へ涼みに行つて、ある茶屋で藝子をあげて遊興したさまを描いたものである。その間にだまして金を捲上げた女が押しかけて來たり、方々の茶屋で無あしらひに逢つたりするさまが、輕妙に且つ皮肉に寫されて居る。當時の見え坊でしかも貧乏な所謂三石侍の實狀を、よく穿つたものであつたのだらう。銅脈が狂詩の餘才を見るべき作で、その歿後遺稿として出版された。

圖録

人情本

人情本は滑稽本と共に、洒落本から分岐し、安永七年田螺金魚作「傾城買虎の卷」、及び寛政十年梅暮里谷峨作「傾城買二筋道」の系統を引いて、段々と轉化して來たものである。文化十四年東里山人作「籬の花」、文政元年同人作「廓鶯」、同二年一九作「清談峯の初花」などは洒落本から人情本への歩み寄りを、著しく示して居る。次いで「假名文章娘節用」や「娘太平記操早引」を書いた曲山人が出て、人情本らしい人情本を作つた。曲山人にはどこか天才的な所があつて、その作品は今日の人が讀んでも、相當に面白いのであるが、惜しい事には早世した。

天保三年には爲永春水が、「春色梅曆」の初編・二編を出して、一躍江戸人情本の元祖となり、次いで「春色辰巳の園」、「春色春告鳥」等を出して、益々その名聲を高めた。

文化・文政・天保の頃は、江戸の文化が爛熟頽廢した時代である。武士も町人も太平に馴れ、人生に退屈した時代である。彼等は極度に生活を享樂し、強い刺戟を求める事によつて、苦しい倦怠から脫しようとした。下らない茶番狂言が流行したのも、遊蕩的氣分が高潮したのも、皆それが爲であつた。寛政改革の結果、黃表紙までが道義臭くなつて、面白くなくなつたので、人々は自由な淫蕩な遊戲氣分にみちた讀み物を要求した。この要求に應じて出たのが、人情本と滑稽本とであつた。その頃は吉原や深川其他の岡場所が非常に繁昌し、公娼の外に藝者・踊子・水茶屋女などの私娼が、市の內外に跋扈した。

春水は自ら相當遊里の經驗を積み、當代の通人津國屋藤次郎（「梅曆」の中に出て來る人）の驥尾に附して、吉原深川などに度々遊んだ。その他藝者・踊子・淸元の師匠・幇間・落語家などゝ親しく交り、自ら寄席へ出て講談をやつた經歷もある程で、さうした社會の事情に通じ、而もその感情や趣味が、自然頽廢期の江戸人を代表するに適して居たのである。彼が人情本に成功した理由は其處にある。

さて人情本の特質は、デカダンな江戸人の、遊里または市井に於ける戀愛生活を、寫實的に描き出すに在る。デリケートな會話によつて綿々として盡きざる男女の痴話や口說を、極めてヴィヴィッドに表現するに在る。見たところ洒落本と同じ樣であるが、洒落本の主

人公は半可通であり、遊里や遊女の説明をしたり、通人氣取りで失敗して、滑稽を演じたりする。之に反して人情本は、餘程眞面目で必ずしも可笑味を狙はない。之は愛する男の爲に、張と意氣地を通さうとする女を中心とする。洒落本の主人公が、女に愛せられようとするのに對して、人情本のそれは、女に愛せられて困ると云ふ風である。即ち大家の若旦那が勘當されて、女の仕送りを受けて怠惰な日を送つて居る、その色男を中心に、二人以上の女が戀愛合戰を始める。出入よろしくあつて一人は正妻に、他は妾となつて目出度く納まるといふのが、共通のプロットである。「春色惠の花」の中で春水は言ふ。「此の如く譯もなき事をくどく云つて、泣いたり泣かせたりするのが人情の道にて、なか〱理屈も評議もなきものなり」と。この言を以て見ても、人情本は大いに理屈や評議のある讀本の反動である事が解る。讀本が空想的概念的で、結構にのみ腐心し、人物は道徳的觀念の傀儡で、勸懲を目的とするのに較べると、人情本は別に筋らしい筋もなく、人物も生きた血の通うた普通の人間であり、その人間らしい人間が、惚れたはれたで泣いたり笑つたりするだけのもので、其處に何等の道德的分子もない。道德的分子どころか、寧ろ誨淫的なポルノグラフィックな所がある。然るに春水は自ら稱して狂訓亭といひ、吾が描く所の女は、たとひ野合の者であつても、皆一人の男に信實を盡すから、貞操が無いとは言へないなど、詭辯を弄して自らの立場を辯護した。けれども當局者はそれを見逃さなかつた。天保の改革は、春水を手鎖の刑に處し、且つ人情本の絕版を命じた。春水は失望の極、自暴自棄に陷り、日夜痛飲して、天保十三年七月に死んだ。彼の流を汲む者に、松亭金水がある。「閑情末摘花」以下の諸作があるが、すべて駄目である。その他「花暦封じ文」、「春色江戸紫」などを出した山々亭有人、「柳の横櫛」「春宵新話風見草」を出した梅亭金鵞、春水の爲に「いろは文庫」の大部分を代作した染崎延房等も居るが、何と云つても人情本の作は春水に盡きる。「梅暦」と「娘節用」を讀めば、それで充分である。

一、清談峯之初花 (Seidan Minenohatsuhana)

作者　十返舍一九

體裁　中本五冊（前編二冊、後編三冊）

出版　前編文政二年春　後編同四年春　江戸人形町通乘物町　鶴屋金助板

內容　人情本の嚆矢である。主人公捨五郎はさる西國浪人の孤兒であつたが、地主福松屋福六の養子となり、許婚のお薫とともに、幸福な日を送るうちに、妾腹なれど實子福太郎が生れた。妾ゆいなの心を察して、福太郎に家督を讓らんがために、捨五郎は態と身を持ち崩して勘當され、上州繪絹屋の番頭と成る。娘おはしに言ひ寄られて、江戸へ歸り、更にある大家の後室に惚れられたが、童貞を守り、同じく福太郎に口說かれて貞操を守り通したお薫改めおりしと結婚する。それと同時に武士なる祖父に邂逅しその跡目を相續するといふ筋。相當賣れたらしい。

圖錄　(136) 前編上目錄の終と本文の始（帳場に居るのが捨五郎、女は娘おはし）　(137) 前編上冊の表紙

二、小三金五郎 假名文章娘節用 (Kanamajiri Musumesetsuyō)

作者　曲山人。作者自畫　歌川國直寫畫

體裁　中本九冊

出版　初編天保二年　二編同三年　三編同五年

內容　斯波家の臣、假名屋文字之進の惣領文之丞は、腰元玉章と駈落し、京に侘住居して、一子金五郎を儲ける。金五郎は長じて本家の養嗣となり、娘お雪に娶される。許婚のお龜は跡を追つて鎌倉へ下り、小三と名乘つて左褄を取るうち、金五郎に邂逅ひ受け出されて一子金次郎を産む。文字之進はお雪可愛さに、小三に金五郎を思ひ切つて呉れと賴む。金五郎を愛するが故に、小三は眞心こめた書置を殘して、その薄倖の一生を終るといふ筋。小三の胸中を察すれば、泪無くしては讀まれないであらう。本書は初編上の序に、誰かの原作を補綴したまでだとあるが、瓦を變じて玉となした功を、認めざるを得ない。「梅暦」とゝもに、確かに人情本中の最傑作である。

圖錄　(138) 第一冊口繪の三と本文の始　(139) 第一冊口繪の一

三、春色梅曆 (Shunshoku Umegoyomi)

作者　狂訓亭爲永春水。畫工柳川重信・同重山

體裁　中本　十二册

出版　初編・二編天保三年、三編・四編同四年

內容　唐琴屋の養子丹次郎、故あつて中の郷に侘住居。唐琴屋の女郎米八は、姉女郎此絲とその客津藤の計らひで、自前の藝妓となり丹次郎に貢ぐ。丹次郎の許婚お長も、故あつて女俠客梅のお由に養はれ、竹蝶吉と名乘つて女義太夫となり、同じく丹次郎に貢ぐ。津藤は本田近常なる侍の內意を受けて、米八の貞節を試さうとて口說くが、米八は此絲への義理立と、丹次郎への操立のため、頑として應じない。朋輩仇吉と女だてらの立引も、皆丹次郎故である。やがて本田の情によつて、丹次郎は實父榛澤六郎に邂逅し、その名跡を繼ぐ。長吉は本妻、米八は妾、お由は津藤へ、此絲は思ふ男へ、それぞれ目出度く納る。

圖錄　(140) 初編上の口繪の一(丹次郎とお長)　(141) 梅曆後編の袋

四、正史實傳いろは文庫 (Iroha-bunko)

作者　爲永春水(五編位迄)、後は二世春水代作。畫工　英泉・英一・鶯齋・芳虎・芳幾

體裁　中本　十八册　五十四卷

出版　自天保七年　至嘉永元年

內容　人情本中の最長篇。未完である。體裁は人情本であるが、內容及び文章は全く讀本めいて居る。第一册の始、版元三林堂の口上に、「戯墨の奇を愛して、實傳を誤り傳ふるも少なからず。仍て卷端に義士の像を、溪齋子に摸畫させ、四十有四人の略傳を春水翁正史によりて是を記せり。復讐のために粉骨碎身の辛苦を厭はず、姿をやつし名を變て、終に本望を遂し光景を寫せば、その事實について、貞婦烈女の事をも出せり。姦惡臆病をいましむるも、勸善懲惡の一端ならざらめやは」とある。猶本書は明

治初年、亞米利加人 Edward Greey氏によつて、"Royal ronins" として飜譯され、ニューヨークに於て、出版された。

圖錄

(142) 第十五冊の表紙

(143) 第一冊口繪の終と本文の始

合巻

黄表紙は寛政の風紀振粛以來、時事に關する記事等を憚つて、その作風一變し、敎訓的の物や、赤本時代の化物咄やが行はれたが、寛政七年南仙笑楚滿人が敵討物を始めてから、この趣向が專ら行はれ、文化初年には黄表紙の大部分は敵討物だといふ程盛んになつた。然るに從來黄表紙は一册の紙數を五丁に限り、二册若くは三册から成つて居たものだが、敵討物の如き內容の複雜なものになつては、十丁乃至十五丁位では盛るに堪へないので、享和三年出版の楚滿人作「敵討巖間鳳尾草」は五册物に綴り、爾來五六册續きものが段々多く現はれ來た。かくて文化三年の春、式亭三馬が「雷太郎强惡物語」十册を出版するに方り、これを前後二編に分ち五册づゝ合綴して賣出してから、大いに世に行はれ、その翌年から草双紙は殆んど合卷の體裁になつてしまつた。合卷の體裁が三馬に始まる事は、彼自ら「式亭雜記」の中に、「合卷とは五册物を一卷に合卷して賣る也、されば合卷の權輿は作者にて予が工夫、板元にて西宮が家に發る」と言つて誇つて居るのだが、實はこれより先文化元年版一九作の「復讐歸花再度譽」も合本二册物であつたらしく、又同じく一九作で文化三年出版の復讐矢指浦前編の序文によれば、全部十二卷を合本二册に編んだ由が見える。だから合卷の體裁も必しも三馬のみの創意とは言へないが、その作「强惡物語」が最もよく行はれたので、自然その功が三馬に歸したのであらう。

かうして合卷が發生して以來、文化四年刊京傳の「於六櫛木曾仇討」には口繪を加へ、漸次圖畫彫刻も精巧となり、表紙を錦繪にする等、體裁は益々美麗を競ふやうになつた。しかしその內容はすでに黄表紙時代と全く面目を異にし、讀本と殆んど同樣のものとなつてしまつた。唯その讀者が多く婦幼であつた爲に、文章にあまり骨を折らず、筋を運ぶのを主とした點が異るくらゐで、結局讀本の附庸的なものとなつてしまつた。且つ讀本と同じく頗る長編の續き物も出、特に種彦の「田舍源氏」は十數年に亘つて出版され、最も世評を高くした。その他笠亭仙果の「八犬傳犬の草紙」、柳下亭種員の「白縫物語」、二世春水の「北雪美談時代鏡」等の長篇物も出、これらの中には明治初年に至るまで續刊されたものもある。又明治に入つては新聞種を新たに合卷に仕立てたものも出來た。しかし要するに合卷の生命とする所は、その挿繪に存した。そこに草双紙としての本質を最後まで持つてゐた譯である。その文學としての價値に至つては多く說くまでもない。却つて作中に歌舞伎から多く材料をとり、挿繪に舞臺のさまや役者の似顏を描いた點などで、演劇史に多大の寄

與を齎すものであらう。畫工としては豐國・國貞・英泉等が最く多く描いて居り、その他當時の名ある浮世繪師は殆んど筆を執つて居ないものはない位である。

一、雷太郎强惡物語 (Ikazuchitarō Gōakumonogatari)

作者　式亭三馬。畫工　歌川豐國

體裁　中　本(合卷)　二　册

出版　文化三年　江戸　西宮源六板

內容　武藏國調布の里近くに住んだ吾妻武藏の忰來太郎と、その友無理太郎とが、强惡非道の所行を數々はたらいて、遂に孝子忠僕等のために滅ぼされるといふ筋で、合卷物の趣向としては取立てゝいふ程の物ではない。唯この書は黃表紙の數册分を一册に合せて、所謂合卷とした最初のものとして知られて居る。即ち全體黃表紙にすれば十册分五十丁を、前後二册に分けて出版したものである。但し本書もまた普通の黃表紙と同じく、十册に仕立てゝ出版されたものも別に存する。

圖錄　(144) 前篇二丁表　(145) 五册目二十五丁裏　(146) 同五册目二十二丁裏と二十三丁表

二、浮世形六枚屛風 (Ukiyogata Rokumaibyōbu)

作者　柳亭種彥。畫工　歌川豐國

體裁　中　本(合卷)　二　册

出版　文政四年

內容　三つ紋の佐吉と二つ櫛の小松との情事を仕組んだ作で、一般の合卷的作風に比して、人情本的な色彩を帶びて居る。本書はかつて弘化四年墺太利國維納で飜譯出版され、又慶應三年五月、その略筋を英文に譯したものを松園梅彥が出版し、明治二年十月更に再版された。ために世界的に汎く紹介されて居る。

圖録 (147) 松園主人飜譯本の見返と一丁表　(148) 二十八丁裏二十九丁表　(149) 最後三十丁裏

三、偐紫田舍源氏 (Nisemurasaki Inakagenji)

作者 柳亭種彦。畫工 歌川國貞

體裁 中本 三十八篇・百五十二册

出版 文政十二年——天保十三年 江戸 鶴屋喜右衛門板

内容 所謂合巻仕立の草双紙中最も名高いもので、名の如く源氏物語の飜案である。源氏物語の通俗化は十帖源氏・をさな源氏等以來屢々試みられて居る事だが、種彦がこれを讀本風の趣向に引直して、しかも合巻として國貞の艶麗な挿繪を加へた事は、本書が大衆的に最も汎く迎へられた所以であつた。本書が好評を得た逸話や、作者畫工の苦心談等は今多く説くまでもなからう。種彦は四十篇までその稿を了へてゐたのだつたが、一朝筆禍にあひつゞいて病歿したので、三十九篇以下は稿本のまゝで出版されなかつた。（近頃この稿本も日本名著全集中に飜刻された）。

圖録 (150) 初篇上下の繪表紙　(151) 初篇上四丁裏五丁表　(152) 十二編序種彦自筆草稿(これは版本でないが參考のため加へた)

談義物

德川時代の小說は、時によつて濃淡の差はあるが、必ず敎訓的色彩を帶びて居る。これは幕府の施政方針の哲學的根據が、儒敎に在つたからである。即ち家康を始め代々の將軍は、儒敎の道德主義を以て、世道人心を統一し、封建的統制を保持しようとした。

その影響が早くも寛文頃の假名草紙に及んで、多くの敎訓物を生じた。初期の敎訓物は大抵儒敎の修身齊家說や、佛敎の因果應報說を平易に解釋したものであるが、朝山意林庵の「淸水物語」や、如儡子の「可笑記」は、儒佛の說や處世の訓戒を說き示したものであつて後世の敎訓物の祖と云はれる。

元祿の浮世草紙と、享保の八文字屋本は、元來が遊女野郎を中心とし、遊里劇場を背景とする享樂文學であるから、敎訓からは殆ど解放されて居る。けれども浮世草紙の町人物及び八字屋本の氣質物には、多少敎訓的要素が見える。それは世人が、淫靡な遊蕩文學に飽きたからでもあらうが、また將軍吉宗の享保の改革にもよる點が多い。

吉宗は元祿奢侈の弊風を一掃せんとし、特に道義觀念の養成に意を用ひた。一例を擧げると、室鳩巣譯「六諭衍義大意」を刊行頒布し之を寺小屋の敎科書に、採用せしめた如きがそれである。內容は孝順父母、尊敬長上、和睦鄕里、敎訓子孫、各安生理、毋作非違の六項目に分れて居る。

更にその頃心學の開祖石田梅巖が出て、江戶初期以來の三敎一致說に、宗敎的體系を與へ、之を一つの實踐道德として、主として町人の精神生活を指導した。彼は「都鄙問答」や、「齊家論」を著はして、その敎旨を明らかにし、屢々市井に講筵を開いて、その主義の宣傳に力めた。

また筑前福岡の碩儒貝原益軒は、貞享四年に「家訓」を著はし、正德三年に「養生訓」を出すまで、前後二十七年の間に、所謂益軒十訓を述作して、社會敎育に盡瘁した。

その他禪門の名僧白隱も、「遠羅天釜」、「辻談義」などを書いて、訓蒙の一助とした。以上諸家の著述は、積極的に倫理を說くもので小說的な讀物ではないが、その言行と相俟つて、直接間接に談義物流行の機緣をなして居る。かゝる風潮に觸發されて、八文字屋本の

教訓的要素は急に增大した。「商人家職訓」、「善惡身持扇」、「渡世身持談義」などの出現が、それを物語る。けれども是等は、その本質が遊戲的なものであつたから、滑稽諷刺が主であつて、教訓は附燒刄たるに過ぎなかつた。

教訓物らしい教訓物、談義物らしい談義物は、增穗殘口の「艷道通鑑」、「有像無像小社探（ホコラサガシ）」、「廣益俗說辨」、「武士訓」、神田白龍子の「本朝武家義士訓」、「本朝童子訓」、丹羽佚齋の「田舍莊子」、「地藏淸談漆刷毛」などであらう。孰れも正德から享保へかけての出版である。

以上の後を承けて、寶曆二年に「當世（イマヤウ）下手談義」が出、同三年に、「教訓讀下手談義」と、「教訓雜長持」の二書が出たのである。けれども是等の教訓は著しく消極的であり、且つ多分に滑稽的要素を含んで居る。その保守的小乘的な點を、暗に反駁したものが、寶曆三年嫌阿作「當風辻談義」である。嫌阿は何人か不明であるが、好阿に對抗する名と見える。寶曆四年の「下手義聽聞集」は、全く「當世下手談義」の延長に過ぎないものである。是等の諸書に次いで、教訓物談義物の類は、年々夥しく出版されたが、その多くは江戸の開版であり、文運の東遷を物語る。

最後に談義物の末は二途に岐れる。初は教訓の方便に、諸國の珍事異聞を集めたのが、後にはそれ自體が目的となり、終に安永八年の「和莊兵衞」の如きものが出るに至つた。次に色慾の愼しむべきを說く事から轉じて、專ら遊里遊女の記述に耽り、終に寶曆四年の「當世花街談義」、同五年の「禁現大福帳」、「花菖蒲待乳問答」の類を出すに至つた。是等の書は孰れも半紙本であるから、後の洒落本とは違ふが、その內容は全く洒落本的である。

要するに談義物は、京阪小說が既に衰へ、江戸小說が未だ興らない時に當つて、寂寥なる讀書界を賑はした一種の倫理小說である。

一、教訓續下手談義 (Kyōkun Zoku-hetadangi)

作者　洛陽沙彌靜觀房好阿（江戸兩國橋畔の寺小屋の師匠　山本善五郎）
體裁　半紙本五册　每册十四五丁
出版　寶曆三年　芝神明前　奧村喜兵衞板

内容　前年に出て、談義物に一時期を劃した「當世下手談義」(半紙本五冊)の續編である。寫眞155の總目錄の通り。當時は享保改革、益軒・梅巖・白隱等の敎訓の影響を受け、民心が元祿の華を去り、漸く實に就かんとする時故、特に倫理小說風の讀物が喜ばれた。本書は此の風潮に乘じて現はれ、「益軒十訓」と八文字屋の氣質物を打つて一丸とし、娛樂の裡に道を說かんとしたのである。終卷總廻向は、正續十卷の敎訓の結論であるが、夫を更に約めて、法然の一枚起請の擬作を掲げ、「町人の身持此一紙に至極せり」と、自負して居る。

圖錄　(153) 初卷の表紙　(154) 同挿繪の一(八王寺なる臍翁の隱居所へ、江戸の本家の手代共が、お談義を聽聞に行く處)　(155) 同總目錄と本文の始

二、敎訓雜長持 (Kyōkun Zōnagamochi)

作者　伊藤單朴

體裁　半紙本五冊

出版　寶曆三年　天明四年再刻　江戸板

内容　序によれば、江戸土產の新板「下手談義」を見て感ずる所あり、「いでや西施が顰にならひて、彼の房が說き殘せしを、里の童や江戸の所緣の少年等が敎にせばやと、心に浮び口に出るまゝ、手にまかせて取り込みぬれば、雜長持とは名附つ」とある。その内容は、天狗が總會を開いて、世上の不心得者を懲すべく決議する話、淺草寺内で奴どもが主人の謗り講を始める話、精靈等が盂蘭盆の待遇が惡いとて不平を竝べる話、及び乞食が互に身の上を懺悔する話等であるが、その敎訓は、「下手談義」と同じく著しく消極的で、且つ多分に滑稽的要素を含んで居る。著者は別に「錢湯新話」・「楚古良探」等の著がある。

圖錄　(156) 第一冊序の終と本文の始　(157) 同挿繪の二(海鹿の九藏と土器阪の喜作が、山の觀音堂で、天狗連の決議を聽かされる所)

三、下手談義聽聞集 (Hetadangi Chōmonshū)

作者　臥竹軒 (傳未詳)

体裁　半紙本五冊、一冊十四丁乃至二十丁

出版　寶暦四年春　江戸　日本橋　松柏堂板

内容　本書の跋に、「下手談義の書は、人の爲に頗る釋尊の說法に等しミ、予ありがたく聽聞する。夫が上にも凡心の得度せざる事もあれば、迷ひの種ミ、愚意の思ひを口走りて、上手談義の法の場に、さし出たるのみ」ミあれば、「雑長持」の作者伊藤單朴ミ共に、靜觀房の後塵を拜するものである。巻一、折越與三治工藤祐經へ返狀の事。巻二、足屋道千神明へ參詣の事。巻三、鵜殿退卜伊勢物語、知道軒後座講談の事。巻四、蜈足齋圓名夢噺の事。巻五、八王寺臍翁葬送竝蓬萊屋富貴右衛門江の島辨財天より寶を授りし事。以上の目錄を見ても、それが「下手談義」の敷衍である事が分る。噺の調子も眞面目さを缺いて居る。

圖録　(158) 第一冊目錄の終ミ本文の始

和歌

室町江戸兩時代の分水嶺に立つて、獨り暗黑の歌壇を照らす者は、細川幽齋である。戰國亂世に處して、よく歌道を支持し、之を後世に傳へた功は、認めねばならないが、二條家の正系を傳へたその歌風と歌論は、さまで推奬すべき程のものではない。その歌系は、中院通勝、烏丸光廣、三條西實條、智仁親王、後水尾天皇、稍下つては武者小路實陰等、堂上の人々に傳はるとともにまた松永貞德、北村季吟、僧元政等、地下の人々にも傳はつた。貞德と同時代の木下長嘯子は、詞藻も豐富であり、歌風も自由であつた。けれども二條家の傳統から、解放されて居たので、堂上派人々の批難を受けた。何と云つても、元祿以前は、歌壇の中心が堂上に在つたからである。

さて元祿時代は、舊慣打破の時代である。自由討究の時代である。漢學を始め、戲曲・小說・俳諧その他凡ゆる文藝は、孰れも傳統の迷蒙を掃蕩されて、その面目を一新した。此の革命的思潮が、歌壇にも及んで、此處に二條家歌學の沒落となるのである。その第一線に立つた者は、江戸の戸田茂睡であつた。

茂睡は堂上派の權威を、微塵に粉碎したが、彼自身積極的に、新歌論を建設する事は出來なかつた。同じ頃の下河邊長流と釋契沖は、共に萬葉研究に一家を成したゞけで、之も特筆すべき歌論と歌風を、有しなかつた。

舊歌論の破壞から、新歌論の建設へ、一歩を踏み出した者は、「國家八論」(寛保二年)の著者、荷田在滿である。彼は歌は詞花言葉の上にあると考へ、「萬葉集」「古今集」よりは、寧ろ「新古今集」を宗とした。また和歌を政治道德の奴隷たらしめる事の不可を論じて、その藝術的性質を明らかにした。併しもう一歩突つ込んで、和歌は藝術なりと、主張するまでには、至らなかつた。

次の加茂眞淵は、萬葉風の古語を用ひ、萬葉調を基調として、之に古今調、新古今調を加味し、藝術味豐かな作風を示した。その門人田安宗武、楫取魚彥、荒木田久老、加藤美樹等は、主として雄渾蒼古な萬葉調を繼承し、加藤千蔭、村田春海、本居宣長等は主として典雅優麗な古今調、乃至幽玄纖細な新古今調を繼承した。殊に宣長は、その作品こそ秀逸に乏しいが、歌の本質を物のあはれに歸するなど、卓拔な歌論を樹立して、同門竝びに後進に、非常なる影響を與へた。

江戸に魚彦、美樹、千蔭、春海等、所謂縣門和歌四天王が存在したのに對して、京には平安四天王が存在した。僧澄月、同慈延、小澤蘆庵、伴蒿蹊等である。孰れも堂上派に育まれた歌人であるが、蘆庵と蒿蹊は、終に舊套を脱して、新風を創めた。

蘆庵は眞淵の尚古趣味を批難して、たゞこと歌を主張した。たゞこと歌とは、自らの眞情を、自らの言葉を以て歌ふ事を意味する。さう言ふたゞこと歌が、何故人を感動せしめるかに言及して、同情論と新情論を提唱し、作歌の方法論を要約して、「古今集」を學べと言つて居る。歌論としては相當整備したものであるし、且つ自ら其の說を、作品の上に具現し、時に平板單調に流れる嫌はあるが、兎に角清新自由な詠草を殘して居る。

蒿蹊はまたまごゝろを尊び、蘆庵と同じく「古今集」に範をとつた。

蘆庵の後を承けて新風を唱へ、當時の歌壇に一時期を劃した者は、香川景樹である。景樹は歌の本質をしらべに歸し、理屈や技巧を捨てゝ、自然の感情を自然に詠めと說いた。而してしらべとは內容と表現の調和を意味する外に、宇宙に旁礴する自然の諧調をも意味する。自然の諧調は言葉で說明し得ない、自ら感得すべきものであり、それを感得し得る者が、眞の歌人であると云ふのである。

かくて內容の自然と、表現の優雅を求めた彼は、古今集に倣ひ、優麗清新なる歌風を以て、一世を風靡した。但し纎巧に過ぎて、平弱に流れた嫌はある。その門人には、熊谷直好、木下幸文、八田知紀等を數へる事が出來る。

その頃江戸には、春海の門人清水濱臣が居り、伊勢には宣長の實子春庭、養嗣大平が居つた。その他藤井高尙、萩原廣道等は、孰れも鈴屋大人の學統を繼ぎ、詠歌にも相當見るべきものがある。更に自ら一家を成した者には、土佐の鹿持雅澄、江戸の橘守部、長崎の中島廣足があり、憂國慷慨の志士にして歌才を有した者には、佐久間象山、平野國臣、久坂玄瑞等がある。

僧良寛、南畵家田能村竹田、公卿千種有功等も、それ〴〵獨自の歌境を開いて、幕末の歌壇を飾つたのであるが、中にも最も異色ある者は、福岡の大隅言道と、福井の橘曙覽とである。言道は勤王の女丈夫野村望東の師であり、その歌は觀察の精緻と、着想の斬新と而して格調の平淡なる點に於て、嶄然群を抜くものである。曙覽は殆ど獨學で、萬葉の心體を得、取材も用語も格調も、極めて自由であるが、その高潔なる人格は、自ら作品に滲み出て、犯し難い氣品を添へて居る。彼の如きは幕末の歌人と云ふよりは、寧ろ明治の歌人と云ふべきである。何故なれば、彼は正岡子規の短歌革新に、絕大の暗示を與へて居るからである。

一、擧　白　集　(Kyohakushū)

作者　木下勝俊

體裁　美濃形大本　八冊（十巻を收む）

出版　慶安二年三月　門人公軌編輯の後を承けて、同門山本春正が、之を刊行した。

内容　第一冊より第三冊までが歌集。第四冊より第八冊までが文集。この文章中、「扶桑拾葉集」に入つて居るものが多い。芭蕉の「嵯峨日記」の中に、「容は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふ」とあるのは、本書「山家記」中の言葉であり、「鶉衣」の「百蟲譜」の中に、「紙魚は長嘯子に憐れまる」とあるのは、本書「しみのことば」を指したのである。本書の出版後翌三年二月尋舊坊の「難擧白集」が出、更にこれに對して「難々擧白集」(作者不明)が出た。

圖録　(159) 第七冊目の表紙　(160) 第一冊本文の始

二、梨　本　集　(Nashinomotoshū)

作者　戸田茂睡

體裁　半紙本二冊

出版　元祿十三年

内容　序文は寛文五年に出した宣言書の文を掲げて、歌語の自由を主張し、「人のいふ程の詞を歌によまれずと云ふ事なし」とか、「詞に多く關をすゑて、人の赴き難きやうに、道を狹くする」から、歌道は日々に衰へるのだと、喝破して居る。詞に關をすゑるとは、1初五文字に置くべからずといふ詞、2終に云ふまじきといふ詞、3遠慮すべきといふ詞、4ぬしある詞、5詠むまじきといふ詞等であるが、それ等は總て不合理であると述べ、一々例證して居る。

圖録　(161) 上巻本文二丁目裏と三丁目表。初五文字に置かれぬ詞、「ほのぼのと」の用例を示して、その謂れなきを説く所　(162) 下巻の終閉一丁

三、志濃夫廼舍歌集 (Shinobunoya Kashū)

作者　橘　曙覽

體裁　美濃形大本　五冊

出版　明治十一年。出版者は息井出今滋

內容　第一卷松籟艸。第二卷襁褓艸。第三卷春明艸。第四卷君來艸。第五卷白蛇艸と福壽艸。いづれも僞らざる生活の歌であり、純眞な眼に映つた自然の歌である。用語も自由であり、歌風も清新である。

圖錄　(163) 第二卷の表紙　(164) 第一卷本文の最初　(165) 第一卷々頭にある肖像

淨瑠璃

淨瑠璃はわが室町時代に出來た語り物であつて、江戸時代の歌謠及び戯曲の大きな、源泉をなすものである。

その起源については、柳亭種彦の考證（還魂紙料、足薪翁記）が動かぬところであらう。宗長日記享祿四年の條に、八月十五夜駿河の宇津山で小座頭を招き淨瑠璃を歌はせたといふ記事や、又守武千句の中に見えてゐる。

いとゞだにざとうまがひの杖つきの

　淨瑠璃かたれともし火のもと

こよひはや時は丑わかふけはてゝ

の句によつて、その內容はすでに牛若丸と淨瑠璃姫との戀物語、即ち現存の十二段草子と同じものであることから推して、淨瑠璃といふ稱呼の根據まで略ぼ斷定が出來ると思ふ。高野博士は能樂の書「猿樂」の記事をあげて、文安年中宇田勾當といふ盲人が「やすだ物語」といふ十二段の語物を語りはじめたといふ說をあげてゐられるが、その事實はともかくも、時代の見當は享祿を遡る事なほ七八十年の文安頃に出來たものと見てよいと思ふ。さすればこれも東山の風流のたゞ中に培れた藝術である。素よりその始は單なる語り物として琵琶を伴奏に用ひるか又扇拍子に合せるほどのものであつたが、これに古く王朝時代から民間に行はれてゐた傀儡(クヾツ)の伎（夷舁ともいふ、今の操人形である）が結びつき、更に新渡來の樂器なる三絃と合せるやうになつて、そこに樂劇としての動かぬ地盤が出來たのである。この三者の提携は文祿頃から慶長へかけて次第に完成し、恰も歌舞伎の鼻祖なるお國かぶきの出現と略ぼ同時代に相竝んで世にもてはやされたのである。その發祥の地はもとより京坂であるから、その土地の柔軟纖細な氣風に染み、且淨瑠璃の一母胎なる古說經節（佛菩薩の本緣を謠ふことから始つて悲哀な佛臭い傳說を語つたもの、所載の「かるかや」はその代表的のものである。）の曲節、筋立に準據した曲風であつたが、慶長末年は、すでに天下の覇府たる江戸に行はれ、その剛健勇武な氣象に接觸して漸次硬化した。特に寛永年中江戸薩摩太夫の盛名は一世に轟き名人が門下に輩出したが、就中和泉太夫（櫻井丹波掾）が、その天性の强勇と時代の趨勢とに乘じて創始した所謂金平節は暴戾と空想との所產であつて、人形の上にも曲節にも怪奇荒唐の新趣を出し、更にそれが京阪に逆流してそこに剛

柔二つの曲風が互ひに融合する機運を生じた。一方これに竝行して加速度の發達を遂げて來た歌舞伎の豐麗な色彩が、又淨るりにも加味せられるやうになつて、貞享元祿期には、井上播磨、宇治加賀掾、ついで竹本筑後掾の如き天才が現れたのである。その內容からいへば、元祿以前は主として太夫の妙音と人形及舞臺構造に支配せられて叙事詩又は劇文學として、さして特色の認められなかつた脚色も、近松門左衛門の出現と共に一躍光輝を發し、筑後の音量と座本竹田父子の巧妙な舞臺裝置(からくり)と相俟つて形式內容殆ど完全の域に達したのである。殊に從來は說經、金平風の說話や、傳奇的材料のみを扱うた時代物から、歌舞伎の世話狂言を摸寫した世話物(曾根崎心中)が上演せられるに及んで、玆に人生に對して深さをもつ寫實劇の樣式が創められた。まさに淨るりの黃金時代である。(近松以前の作品を總稱して古淨るりといふ)かく發達し來つた淨るりは近松を起點として更に轉廻し、その後繼者なる竹田出雲又は近松半二の手に移されていつたが、これらの人々の工夫によつて、舞臺も人形もいよ〳〵複雜精妙に赴く一方には、主として興行物としての目先の效果のみを重んじる弊が加はり、所謂趣向に墮して、內面の自然な發展と流動性とを缺き、近松物に見るやうなふつくりとした味を失うた。ここに世話物の妙作は再び見られなくなつてしまつた。

たゞ人形と舞臺の發達が、なほ人の心を引つけて寶曆頃までは隆盛を見た。淨るりもその樂劇的要素が逆に歌舞伎の方に移植せられ準樂劇としてのわが「舊劇」の型が出來上つて來ると共に、淨るりの方は次第に凋落の影を見せたのである。しかし今日でも大阪に唯一つ文樂座が殘つて過去の尊い形見として世界に類のない人形劇として、未來の國劇の上にも多くの暗示を與へてゐる。

一、せつきやうかるかや (Sekkyō Karukaya)

作者　不詳

體裁　半紙本合一冊

出版　寛永十六年　京上るりや喜右衛門板

內容　說經は御伽草子と共に室町時代の中流下層社會の慰めとして流行した語物である。かるかやは現存する正本中でも最古の一つで寛永二年の「高館」に次ぐ繪入淨るり本であつて、柳亭種彥が用捨箱に載せてゐるのも即ちこれである。なほ同書に引いてゐる

る六字南無右衛門の正本「やしま」には寛永十六年正月吉日、二條通御幸町西へ入丁、上るりや喜右衛門開之とあるのは、この奥付の上るりや喜右衛門と同じ板元と思はれる。内容は所謂本地物で、信濃善光寺の傍にある親子地藏(苅萱堂)の由來をのべたものである。挿繪には簡素な丹緑の彩色を施し、普通淨るり本の六段形式をとらずに、上中下の三段に分つてゐるところにお伽草子の俤を存し、雅致掬すべきものがある。

圖錄 (166) 發端一丁表 (167) 中段の終 (168) 下段の挿畫 (169) 本文の最後

二、公平法門諍 (Kimpira Hōmon-arasoi)

作者 不詳。天下一上總少掾正信正本

體裁 繪入半紙本一册

出版 寛文三年九月 京二條通 正本屋九兵衛板

內容 これは寛文三年の年號が明示されてゐる。賴光跡目論と共に上方金平淨るりの双璧である 筋は、源賴義が東山の滿容上人を信仰し愛子加茂次郎義宗を出家させる意があるので、金平怒つて上人と法門諍ひをやり暴力でこれを逐ひ、主人の討手を引うけて義宗を擁して自らの館にこもる。討手の大將渡邊兄第その志を憐み、兩人戰死と披露してこれを落してやる。加賀掾が「忠臣身替物語」と改めて語つた時には、加茂次郎の身替を立てるといふ一段を加へてこれを中心にしてゐる。暴戾武骨一遍の關東の金平物が、義理人情の上方趣味を加味してゐるところにその特徵が存する。身替の段は謠曲仲光の飜案であることは明かである。上總掾正信は明暦頃京都に於ける金平節の名手で、通稱次郎兵衛といひ、江戸虎屋源太夫の門人である。

圖錄 (170) 表紙題簽 (171) 發端、第一丁表 (172) 挿畫

三、大竹集 (Ōtakeshū)

作者 宇治加賀掾編

體裁　美濃版大形本　一冊

出版　延寶九年　京　つほ屋吉左衛門開板

內容　淨るり革新の先驅者なる宇治加賀掾が京都で旗上げをしたのが延寶二年で、これは同九年、その得意の節事を集めて出した最初の出版と見られる。

寫眞に見えてゐる目次の以外にも、虎遁世記、惟喬位諍、虎之卷、榮花物語、十六夜物語、五百羅漢、戀塚物語の詞章を採り、しかもその大部分は近松の青年期の作品に屬する。就中、虎遁世記は加賀掾が出世興行の出し物であるし、種々な意味に於て貴重な段物集である。

序文の終りに見える加賀掾校合の署名は、彼自身の筆で、こゝに表紙、序文、奥附の一部をのせた。なほこれと同系の宇治物の板本に小竹集、紫竹集などが現存する。

圖錄　(173) 表紙　(174) 奥書　(175) 目次裏及第一丁表

四、世繼曾我 (Yotsugi Soga)

作者　近松門左衛門

體裁　半紙本　一冊

出版　天和三年九月　京　山本九兵衛板

內容　これは元來、宇治加賀掾の爲に書かれた正本であるが、貞享二年二月竹本座創立の際に用ひた語物として有名である。

曾我兄弟の討入より、二人の死後虎少將が曾我の里に老母を尋ねて、夜討の有樣を物語り、又頼朝の御臺所の所望によつて、兩人が風流の舞を舞ふといつた筋立で、近松の初期の作品に見る景事、節事を澤山挿入した花のやうな作風で、文章も流麗である。

卷末に天和三年九月と、年號の存するのは極めて珍らしく、淨るり史上貴重な材料である。

圖錄　(176) 發端第一丁表　(二)(177) 最後と奥附開

五、曾根崎心中 (Sonezaki Shinjū)

作者　近松門左衛門

體裁　大形半紙本一冊

出版　元祿十六年　大阪　山本九兵衛板

內容　文學史上一時期を劃した名高い作品で、世話淨るりの嚆矢である。元祿十六年五月の上場にかゝる。近松の新機軸と、人形遣ひ辰松八郎兵衛の工夫と、竹本義太夫の美音とが相俟つて、一世の大當りをとつたのである。この正本は普通の八行本よりも形やゝ大きく、紙質板下共にすぐれた六行本である。そして卷頭に竹本筑後掾と、巢林子との序文がのつてゐるのも珍らしい元祿十六年秋の板行である。

圖錄　(178) 作者序開　(179) 發端第一丁表

六、遊女誠草 (Yūjo Makotogusa)

作者　不詳

體裁　半紙本一冊

出版　未詳　京　山本六兵衛改板

內容　元祿十六年曾根崎心中が現れてからは、感じやすい世間にさまざまな刺戟を與へたので、その改作や、後日ものが數多く出た。これは曾根崎丸屋しげといふ遊女の一人心中を描いたもので、愛する男が、自分のために身の治らぬのを悲しむ情と、お初の死を追慕する念から、一周忌のころに自殺した事實を材料にしてゐる。行文も單調な抒情句が多く、迚も近松ほどの筆力は見られまいが、筋の上にお初の兩親や、敵役の九平次などを出して曾根崎追善の心をこめたところに一寸した趣向が見られる。道行の段には「はりまぶし」と註してゐる。井上播磨の曲風を用ひたものと見え

る。寶永元年五月大阪竹本座の上演で、板式も粗末な十行本である。

圖録　(180) 發端一丁表

七、心中二つ腹帶 (Sinjū Futatsu-haraobi)

作者　紀海音

體裁　半紙本一冊

出版　不詳

內容　享保七年四月六日大阪豐竹座上場、お千代半兵衛の心中である。そして同材を潤色した近松の心中宵庚申に先つこと僅に十六日、紀海音の當り作である。

事實はその前年四月十六日拂曉のことで、生玉馬場先の大佛殿勸進所の門前で緋毛氈を敷き、男女共に腹帶をしめて一つ刄に伏したのが評判となり、同時にこの外題の由來するところともなつたのである。

海音の淨るりは、近松に較べて正本が遙に乏しい恨はあるが、この十行本は表紙題簽共に整ひ、當時の院本の體裁をよく示してゐる。

なほこの作の系統を引いたものに、初物八百屋獻立(明和六)などがあり、歌舞伎の方にも花毛氈二つ腹帶(享保七、中村座)以來今日までも演じられてゐる。

圖録　(181) 表紙題簽　(182) 發端一丁表

八、化競丑滿鐘 (Bakekurabe Ushimitsu-no-Kane)

作者　曲亭馬琴

體裁　半紙本一冊

出版　安政十二年　江戸　蔦屋重三郎板

内容　題箋板式すべて院本を摸した所謂讀本淨るりとよばれるものゝ代表をなすもので、寛政十二年五月の板作である
馬琴が草表紙洒落本作者の氣分から、讀本作者としての自覺に達するまでの過渡期の作品として興味がある。化物仲間のろくろ姫と白狐之介との戀仲を中心に、文ぶく茶釜と白狐の玉との紛失といふ筋を綯ひ交ぜて歌舞伎風なお家騷動物である。
「聲もへだてのからかみを、さつと開けば白狐之介、かうべにいたゞく天靈蓋(きれこうべ)、腰に馬骨(はこつ)の太刀をはき、藻屑の直垂さわやかに立いで給ふ」云々の文句によつてゞも、その洒落氣分がよくわかると思ふ。京傳にも「捷徑(チカミチ)太平記」といふ同種の淨るりがある

圖錄　(183)(二)發端　(184)見返　(185)挿繪

脚本といふことを廣義に解すれば、すべての演劇の筋立といふことになるから、單なる歌舞から獨立した歌舞伎の創始時代すでに存在したわけである。寛永ごろ流行した猿若狂言や、海道下りの如きものもすべてこれに屬する。けれども狂言本として今日世に存するものでは、すべて元祿前後のもので、富永平兵衛や近松門左衛門らの趣向になるものが多い。これらの貴重なる材料も、すべてたゞあら筋の記述と簡單なせりふの俤をとゞめる位で、僅にその挿畫によつて豐富な舞臺面を想像するにとゞまる。この中からは何ら文學的(戯曲的)感銘も得られぬほど粗末なものである。そして舊歌舞伎時代の遊戯氣分と、寫實的な新技藝(所謂地藝)などが妙に融合し切らぬところに元祿狂言の興味と物足らなさがあるのである。

上方は坂田藤十郎などの演じた——好色本式の味をもつ傾城買の狂言、即ち和事が中心となり、江戸は金平淨るりからヒントを得て創めたといはるゝ市川團十郎の荒事がもてはやされ、この和事と荒事とが寫實と夢幻とのわが演劇の二要素をなしたのである。かうした流れが享保から寶暦に入つて、次第に舊歌舞伎の臭味を脫離し、筋立の自然と直接な社會の摸寫を喜ぶやうになり、世話淨るりに見るやうな甘い透明な內容をもつ世話狂言が出るやうになつた。並木正三の宿無團七の如きはその先驅をなすものである。けれども歌舞伎の基調をなすものは、やはり時代物と世話物との間をゆくお家騷動ものであつて、寶物の紛失といつたやうな型が千篇一律に行はれ、世話物もたゞ挿話的な意味しかもたないのであつたが、後並木五瓶の如き才人が出て、上方から江戸に遷り、その劇界を支配するやうになつてから、時代と世話とは全然分離し、各自がそれ〴〵獨立した情緒の上に立つやうになつた。ついで鶴屋南北は江戸歌舞伎の夢幻氣分を世話物に應用し、醜と怪と血の狂言——物凄い超現實的な、そしてあくまでも寫實的な狂言を描いて、世を驚嘆せしめたのである。最後に出た河竹新七(默阿彌)は、老近松に見るやうな大きい常識の上に立ち、過去のすべてを綜合して、主知的な上方狂言と、主情的な江戸狂言を巧に融合せしめ、南北によつてなされた惡の讃美は、默阿彌の白浪物に見るやうな惡の淨化となり、抒情詩的なる情緒を寫實的な趣向の中に宿すことによつて、純文學の領域に確な地步を占めるやうになつた。

この作家の大きな手で、三百年の歷史をもつ興味本位の舊歌舞伎は、思想及個性の描寫を主とする近代劇の精神に結びつけられたこ

考へることが出來る。

一、けいせい若紫 (Keisei Wakamurasaki)

作者　不詳

體裁　中形本一冊

出版　不詳　京　八文字屋八左衛門板

内容　これは上卷を缺いてゐるので筋の全體はわからぬが、御手洗三左衛門が傾城若紫との戀の爲に金に窮したあまり、一夜泊めた高野聖を刺し殺して金子を奪つたが、その怨念が兩人の間の子供(七ッ子といふ)に宿り、親につき纒ふといつた變つた因果咄である。

この三左衛門は坂田藤十郎が演じ「身の上懺悔ばなし」といふ長せりふで、この因果應報を物語るひとり狂言の場面がある。傾城佛ヶ原で、梅房文藏が喋り立てるやうな陽氣な長咄とはかはり、一味凄涼の氣が流れて、よく藤十郎の末期の技藝を想はせるあるものがある。

圖錄　(186) 中卷發端一丁　(187) 表紙題簽　(188) 挿畫は山路姫道行。糺の森で主膳と兩人で謠曲「海人」を舞うてゐるところ。

二、けいせいふたつ石 (Keisei Futatsuishi)

作者　不詳

體裁　中形本一冊

出版　不詳　京　八文字屋八左衛門板

内容　この狂言本は題簽に見える通り、京大和屋甚兵衛座で當りを取つた雌床山を、澤村長十郎座で二の替の興行として、夫立石

と題して出したものである。

「追付上本いだし候」とあるから、もつと委しい筋書も出たことと思はれる。役者附は缺けてゐるが、享保三年と推定の出來る日本振袖始に顔を出してゐる片山小左衛門、坂東彦三郎などの名が挿畫の各所に散見してゐるから、表紙書入の通り正德六年（享保元）春の興行らしい。

例の複雑なお家騒動で、大井家の若殿安之亟の遊蕩、弟吉次郎の苦心などに女敵討の趣向をはめ込んでゐる。大切、安之亟が萬歳になつて太夫よしだとの口舌の段は、夕霧の俤を學んだ世話物である。

圖錄 (189) 表紙題簽　(190) 發端一丁表　(191) 挿畫　太夫吉田が安之亟の身代りとなり灯を消して討たれるところである。

三、日本振袖始 (Nippon Furisodehajime)

作者　近松門左衛門

體裁　半紙本一冊

出版　不詳　京二條　鶴屋喜右衛門板

内容　近松の淨瑠璃、日本振袖始は享保三年二月二十二日の興行で、素戔嗚尊と蘇民將來との傳說を巧に取入れた作品であるが、この狂言本も全くその筋通りに仕組んだもので、普通の三番つゞきの形式を採らず、全場五段に分つてゐるのも、時代淨るりの通りである。京都早雲座の興行で、芝居淨るりとして都一中の名が出てゐる。もとより近松の筆ではない。立役柴崎林左衛門の動靜から推斷して、享保三年二の替の興行といふ高野博士の考證は當つてゐると思ふ。表紙題簽、竝に外題脇の赤紙も完全に殘つてゐる。

圖錄 (192) 表紙題簽　(193) 發端一丁　(194) 挿畫

四、けいせい八萬日 (Keisei Hachimannichi)

作者　不　詳
體裁　中形横本一冊
出版　不　詳　京　八文字屋八左衛門板
內容　これは普通の狂言本と異り、珍重すべき横本で、挿畫の上には別に役者評判記がのつてゐる。
これによると柴崎林左衛門はすでに老境に在り、音羽治郎三郎も上々吉の位附を有してゐるから、正德享保の頃に相違なく、殊に柴崎が享保四年の暮は京都萬太夫座に出てゐることから推して、享保五年二の替の興行と見られる。
坂本西敎寺の八萬日回向の趣向を採つた例のお家騷動もので、挿畫のところは家老貫兵衛(音羽治郎三役)がお家の爲に小さい若君に紙衣をきせて逐ひ出すといふ變つた愁歎場である。筋はあまりに入組んでゐて何の統一もないが、兎も角も當り狂言であつたと見ゐる。作者はわからぬが多少文筆の才のあつた音羽治郎三の作ではないかと思はれる。

圖錄　(195) 表紙題簽　(196) 役者附　(197) 挿畫及役者評判

五、宿無團七時雨傘 (Yadonashi-Danshichi Shigure-no-Karakasa)

作者　並木正三
體裁　繪入半紙本三冊
出版　不　詳
內容　この根本は明和五年の七月興行に大阪竹田の芝居で上場したもので、並木正三(享保一五—安永二)の傑作ではあるが、事實はその頃道頓堀の岩井風呂にあつた殺人事件を脚色した、所謂一夜漬の世話物である。元來淨るり作者並木宗輔(千柳)の弟子として操芝居の技巧裝置に精通してゐたこの作者は、せり上や廻り道具のやうな新工夫にも、作品の內容にも多く淨るり芝居の暗

示をうけてゐる。この曲も夏祭浪花鑑で流行した團七縞の人形衣裝を應用して、涼しい夏芝居の仕組みを立てゝゐる　會話は純上方風の甘い寫實で、脚本中に正三自身（本名高砂屋平右衛門）が舞臺に現れて、遊蕩兒茂兵衛を意見する一齣を加へてゐる。筋もよく通り、さら〱として上乘の世話狂言ぶりである。

圖　錄　(198) 發端四丁裏と五丁表　(199) 役者附

六、文月恨切子 (Fumizuki Urami-no-Kiriko)

作　者　近松德三

體　裁　繪入半紙本三冊

出　版　不詳

內　容　歌舞伎の根本は、大阪の正本屋利右衛門が世間の嗜好を考へて臺帳を寫本に仕立て、明和頃同好者に回覽させたのが始りでこれが筋を辿り、理を逐ふ浪花人の好尙に叶ひ、其後、曉鐘成が上梓して卑俗な繪入半紙本として數十種の新古狂言を公にしたものであつて、これもその一つである。

作者近松德三（寶曆一一―文化七）は大阪坂町の娼家の主人で、はじめ淨るり作者近松半二の門に入り、後歌舞伎に轉じて並木五瓶と肩を竝べるやうになつた。作風は讀本種や際物を巧に脚色するやり方で、獨創の才に乏しく、大抵は飜案の傾向をもつてゐる。恨切子は今日も演じられる名作で、古い祭文にも唄はれた古手屋八郎兵衛のお妻殺しを書いたもので、上方唄の情緒を利用し、寂し味の勝つた世話物である。

圖　錄　(200) 口繪　(201) 表紙　(202) 役者附

歌曲

小唄とよぶ名稱は古く王朝時代の文獻に現はれてゐるが、これは今日のやうな流行唄を指してゐるものではない。宮廷の大歌に對する稱呼として狹い範圍にしか用ひられてゐない。又記紀の中に見える有名な童謠(ワザウタ)、催馬樂の中にある早歌、下つて鎌倉の白拍子たちの今樣、雜藝の類もすべて近世小唄と內容の上の聯絡は保つてゐるが、嚴密に言へば室町末期に出來た隆達小唄(一節切の尺八に合せたもの)を出發點として、これが三味線の渡來及びその傳播につれて近世的の情緒を釀成し、お國以來の歌舞伎小唄や、遊里の歌謠なる弄齋投節と流轉して、五七五の短歌調から七七七五の小唄調へと移つていつたのである。

今日から見て、かうした近世的歌曲の流れを大體二つに分けることが出來る。一つは上方の檢校たちに培れ、箏三絃に合せて成長した地唄と、江戶歌舞伎の舞臺に用ひられ、主として歌舞に伴うて謠はれた江戶唄とである。がこの兩者は互に混淆して形式の上で判然たる區劃は出來兼ねるが、共に室町の歌謠から出て、地唄は箏曲の古雅な今樣調を含み、江戶唄は放縱な歌舞伎踊歌の性質を帶びてゐる。

かの「松の葉」は、この地唄を集成した代表的のもので、組唄端手うたの古曲と長唄端唄の如き新曲とを網羅し、元祿文學の中に可憐の紅玉を投じてゐる。

近松の作品に現れてゐる俗謠の類も、多くこれらの歌曲集の中に發見せられる。延いてこれの增補とも見るべき「落葉集」や、「若みどり」の如きもすべてこの書に倣うてゐる。

「若みどり」以後、上方に刊行せられた多くの地唄本は、たゞ微溫的な補綴をくり返したものばかりで、清新の趣を全く失うたが、これに反し、江戶唄の血脈は、江戶長唄を本流として、それに江戶淨瑠璃の系統をひいた半太夫節、河東節が加はり、又上方の一中節から出た宮古路豐後(豐後節)の一流が常盤津となり、富本、淸元或は新內、薗八となつて、京阪の義太夫節及び地唄と對立し、豐富な音曲の淵叢をなしてゐるのである。

一、知音の媒 (Chiin-no-Nakadachi)

作者　松風軒

體裁　繪入小本一册

出版　元祿十二年　永田調兵衛板

內容　「ちいんのなかだち」とよむ。琴唄の書物では最も古いものかと思はれる。次の大怒佐、紙鳶とを合せて糸竹大全とよび、元祿十二年己卯板行で氣の利いた繪入小本である。

尤もその以前、貞享年中に單行本として公刊せられたものを、再板したものであるといふ。が、元祿七年吉田邑琴子の著した松月鈔と比較するのに大同小異で、共に八橋撿校の十三組の唱歌をのせ、新曲は加へてゐない。そして古拙な註を加へてゐる點やら、師宣風の挿畫をはさんでゐるところに雅味がないではない。

序文に伯牙鍾子期の古事をのせて知音の意味を說き、琴の初門に入る手引とすると記してゐる。松風軒といふ名前が出てゐるが何人の著述かわからない。

圖錄 (203) 表紙

二、大怒佐 (Ōnusa)

作者　不詳

體裁　繪入小本二册

出版　元祿十二年　永田調兵衛板　表に「三味せん初心書」と小書きあり

內容　大ぬさは小本二册、內容は四卷に分れてゐる。知音の媒と同裝同種の書物である。これは三味線唄を集めたもので、名高い「よしの山」や「すがゝき」をはじめ、投ぶし本手破手の唱歌が載つてゐる。なほ四の卷には新曲(端唄、長唄)を加へ、三味線の手

までこまかに書きしるしてあつて、書體さし繪、刊行年月すべて知音の媒と同一である。

一二の巻は三味線のひきやう、三には本手破手の組歌、四には新曲といふ順序になつてゐる。

大ぬさは「引く手あまた」といふ伊勢物語の歌によつて題したものである。

圖録 (204) 表紙題簽　(205) 上巻二十三丁裏と二十四丁表挿畫

三、紙鳶 (Ikanobori)

作者　不詳

體裁　繪入小本一冊

出版　元祿十二年　永田調兵衛板

内容　これは一節切の指南書で、糸竹初心抄、洞簫曲についで刊行されたものである。これには笛の吹きやうを委しく說明してゐるのが珍しい。貞享四年山本五兵衛板のものが世に存するといふがまだ見ない。但し元祿五年の書籍目錄にいかのぼり二冊、大ぬさ四冊、知音の媒二冊とあれば、三書とも元祿五年以前にすでに刊行された事は確かである。(寫眞は元祿十二年糸竹大全として公にせられたものに據る)

内容は上中下二部に分れ、上には小唄亂曲の歌譜をのせ、中下には笛の手吹き方を敎へてゐる

いかのぼりの表題は「吹けばあがる」といふ洒落である

圖録 (206) 序文　(207) 奥書　(208) 九丁裏及十丁表挿畫

四、松の葉 (Matsu-no-Ha)

作者　秀松軒

體裁　半紙本五冊

出版　元祿十六年　京　井筒屋庄兵衞、萬木治兵衞板行

內容　元祿十六年六月に出た三味せん小唄集で、編者は秀松軒とあるが何人かよくわからぬ。墨譜もなしに歌詞ばかりを示したものであるが、元祿の盛期に於ける歌謠の粹は悉く集められてゐる。一卷は三味の古曲、二は長唄、三は端唄、四は吾妻淨瑠璃、五は古今百首投節といつた工合に、整然と集められてゐる。この書をもとにして落葉集、若みどりのやうな名著が續々世に出たのである。

「于時元祿十あまり癸の未龍集の凉み月、秀松軒の木のもとに書き集めぬれば、松の葉と名づけぬるもむべなるべし」と自ら序に書いてゐる。

圖錄　(209) 卷一目錄及第一丁

五、若　み　ど　り (Wakamidori)

作者　靜雲閣主人

體裁　半紙本五册

出版　寶永三年　京　丹波屋茂兵衞板

內容　正德三年改題して「續松の葉」とよんでゐる。有名な小唄揃へ松の葉(元祿十六年板)、落葉集(寶永元年板、同七年增補)の跡を繼いだもので、體裁板式すべて前二者に倣うてゐる。編者靜雲閣主人は何人か明かでないが、野川撿校の作に自作をも加へて、全部五卷にしたと述べてゐる。

內容は長唄、端唄に吾妻淨瑠璃(江戸半太夫節)を加へ、前二集に洩れた曲を集め、巢林子の戯曲とも深い關係をもつてゐる。ただ松の落葉に見るやうな芝居唄はなく、短かな小曲の數が增してゐる。「續松の葉」と改めた時に吾妻淨瑠璃の「かよひ路」の一曲を加へてゐるが、その他に變りはない。元祿享保頃の溫雅な歌曲は、この集を最後にして次第に衰微していつたのである。

圖錄　(210) 表紙題簽　(211) 序の一部及挿畫　(212) 目錄及第一丁

六、京鹿子娘道成寺 (Kyōganoko Musume Dōjōji)

作者　不詳

體裁　半紙本一册

出版　寶暦三年　板元いが屋とあり、

內容　江戸長唄は、地唄の長唄に對する稱である。これは猿若勘三郎の弟勘五郎(杵屋)によつて創められた芝居唄で、江戸の歌曲を代表してゐる。京鹿子娘道成寺は寶暦三年江戸中村座で中村富十郎が始めて演じたもので、男達初買曾我の四番目に織込まれた所作事である。筋は謠曲の道成寺に胚胎してゐるが、これ以前元祿期に榊山小四郎が演じた道成寺があるといふ。內容の變化抑揚に富んだ歌曲として、數ある道成寺ものゝ中での白眉である。

圖錄 (213) 繪入表紙

七、仁本鳥 (Niodori)

作者　不詳

體裁　横本二册

出版　不詳　鶴屋喜右衛門板

內容　これは十寸見河東(本姓は伊藤藤十郎といふ)の創めた河東節の歌曲を集めたもので、最も最初のものである。これはその師なる江戸半太夫の語物を多くのせてゐる上に、河東自身も半太夫の弟子として署名してゐるから、遲くとも享保初年の刊行と思はれる。特に板を起したもので、體裁も綴合せものでなく、和歌集に擬して部立を設け、歌曲を分類してゐる。兎も角も助六狂言の流行と共に、江戸氣分の滋味を充分に現はしてゐるすぐれた唄ひ物である。この書の拾遺と見るべきものに、享保十七年の鳰鳥新萬葉集があり、その他有名なものに、夜半樂、紅葉集、幸葉集、十寸見要集などが年を逐うて刊行されてゐる。

圖録 (214) 表紙 (215) 一の巻第一丁

八、菊嬉閨睦言 (Kiku mo ureshiki neya no mutsugoto)

作者 不詳

體裁 半紙本一冊

出版 弘化元年 山本平吉板

内容 清元節は富本節から出たもので、清元延壽太夫(文政八年歿)にはじまる。長唄、常盤津に對して江戸歌舞伎に特種な情緒を與へてゐる歌曲である。その卑俗な味と、纖細なリズムとが強く時代を捉へたのである。この曲は鶴屋南北の四谷怪談の五度目の所演、弘化元年七月の中村座の狂言に加へた景事で「菊嬉閨睦言(キクモウレシキネヤノムツゴト)」とよばれる 陰慘な怪談の對照として、目もさめるやうな色彩と諧調とで、巧妙な舞臺効果を收めた有名な語り物である。

圖録 (216) 繪入表紙

九、宮薗鸚鵡石 (Miyasono Ōmuseki)

作者 不詳

體裁 半紙本二冊

出版 安永二年板

内容 薗八節は宮古路豊後の高弟宮古路薗八から起つた一流で宮薗節ともいふ。その門より出た鸞鳳軒は、明和安永頃京都でもてはやされた。鸚鵡石はその語物を集めたものゝ中で屈指のものである。これは豊後節と同じく主として淨瑠璃もの、殊に近松の道行の多くを收めてゐる。江戸の叙事的(所作事風な)歌曲に比して、抒情的傾向を帶び、派手な所作や踊地には向かないが、上方好尚に叶ひ、芝居唄としても用ひられたが、江戸に起つた數ある新歌曲の力に壓倒されて、今日では殆んど唄はれなくなつて

しまつた。

圖録

217) 目錄及第一丁表

俳諧

俳諧は元來俳諧の連歌の略稱で、即ち滑稽調の連歌を稱したのである。室町時代に連歌が盛んに行はれたのに隨つて、俳諧の連歌もまたその餘興として汎く行はれた。特に山崎宗鑑と荒木田守武とは、一は俳諧撰集の嚆矢たる「犬筑波集」の撰者として、一は俳諧千句の獨吟を試みた事によつて名高く、共に俳諧の鼻祖とされてゐる。しかし俳諧が遂に連歌を壓倒して獨立した一の文學と認められるまでになつたのは、江戸時代になつてからの事である。

江戸時代の俳諧は、まづ松永貞德によつてその基礎がおかれた。彼は細川幽齋・九條稙通・里村紹巴等に學んで、和歌、連歌の造詣が深かつたが、自分は俳諧一道の宗匠として立ち、安原貞室・北村季吟・山本西武(サイム)・高瀨梅盛・鶏冠井(カヘデヰ)令德等の門人を率ゐて俳諧の普及に努めた。而して自ら「新增犬筑波集」を著はして附句の範を示し、又「御傘(ゴサン)」を撰んで俳諧の式目を定めた。しかし彼は俳諧を「俳言を賦した連歌」だと定義し、連歌との區別點を單に用語の上に置いたので、その滑稽といふのも主として緣語掛詞等言語の技巧に終り未だ眞の文藝的要素を持つ迄に至らなかつた。なほ當時名高い俳人には松江維舟・野々口立圃・齋藤德元・杉木望一等がある。維舟・立圃の二人は一時貞德に學んだが、後師から離れて各々一派を立て、共に多くの俳書を撰んだ。德元は石田未得・高島玄札等と共に江戸俳壇の古老として知られ、望一は伊勢にあつて守武の遺風をついだ。しかしいづれもその俳風は貞德に倣ひ、特に異色あるものはなかつた。かくて貞德は近世における俳諧勃興の基礎を作つた點で、その功績を認めねばならないが、その俳諧は文學的價値に乏しく、且つ千篇一律の句風に流れて漸く世人から倦かれて來た。その際に時流に先んじて新俳風を唱道したのは西山宗因である。

宗因は元來連歌を學んだのであるが、後俳諧に志し寛文末年頃から一種の清新な句風をはじめた　その門下には大阪に井原西鶴・京に菅野谷高政、江戸に田代松意等新進氣鋭の士が多く、この新風は忽ち貞門の古風に代つて全國の俳壇を風靡するに至つた。これを世に談林風といふ。談林の俳諧は貞門の如く法式に拘泥せず、內容形式共に自由で、清新潑剌の風に富んだ。且つ滑稽も些か內面的に進んで來たが、その根柢はやはり言語の洒落や奇拔な見立にあつたので、決して藝術の第一義にふれたものではなかつた。それで延寶末年頃から俳壇一般の間に、漸く眞面目な自覺と反省とが起つて、革新の機運が動いて來た。松尾芭蕉・池西言水・椎本才麿・上島鬼貫

小西來山等は、即ちこの革新運動の中心人物となつて、先づ動いた人々である。特に芭蕉はそのすぐれた天分と不斷の努力とによつて遂に俳諧を文學として大成させるに至つた。

芭蕉はもと季吟に學んで貞門風の句を作り、ついで談林が盛んになるとこれに心醉して梅翁の風を謳歌した。しかも遂に貞門談林の遊戯的態度に滿足する事が出來ないで、俳諧に眞の藝術的意義を見出さうと努めた。而して我を脫して造化にかへるのが風雅の神髓であると悟つて、俳諧の根柢をこの風雅に置いた。かくて貞享以後彼の句風は全く面目を新たにし、こゝに始めて俳諧は單なる遊戯文學の境を脫して、眞面目な文學となるに至つた。且つ彼の崇高な人格は衆望の攅まる所となつて、蕉門に歸する者は日に多きを加へた。就中榎本其角・服部嵐雪・內藤丈草・向井去來・森川許六・各務支考等は、最も代表的の人々である。芭蕉歿後俳壇は統制の器を缺いて四分五裂し、其角の末流は洒落風と稱して、立羽不角一派の化鳥(ケテウ)風と共に徒らに險晦の調を弄し、支考は平談俗話を高潮して、伊勢の岩田凉菟・中川乙由等の所謂麥林風と共に卑俗な美濃風の端を發いた。かくて享保から元文・寶曆にかけては、江戶の水間沾德(セントク)、京阪の松木淡々等が益々俳壇を俗化せしめ、その間に五色墨一派の更新運動などもあつたけれども、遂に墮落の大勢をどうする事も出來なかつた。

明和安永に至つて俳壇は再び目ざめた　俳諧を卑俗の調から拯つて高雅な趣味にかへらうとする運動は、期せずして諸方に起つた。江戶の大島蓼太・加舍白雄(カヤシラヲ)、尾張の久村曉臺、加賀の堀麥水・高桑闌更・伊勢の三浦樗良、京都の與謝蕪村、播磨の松岡靑蘿等がその中心人物である。蓼太は三世雪中庵として從來江戶座に壓せられてゐた雪門の興隆に力を盡し、白雄は信州上田から出て江戶に春秋庵を開いた。曉臺は貞享の「冬の日」を慕つて更にその光をかがやかさうとし、樗良は支麥の風に慊らずして自ら新風を起した。麥水・闌更も元來伊勢派の人であるが、一は「新虛栗」を出して、延寶天和の古調を唱へ、一は京都に出て南無庵の主となり門人を多く養つた。靑蘿と蕪村は京阪地方にあつてまた新風の勃興に相應じた。就中蕪村は最も藝術家としての天分に富み、高雅な古典的趣味と、畫人として養ひ來つた客觀的描寫法とを以て、豐麗巧緻な句風にすぐれた作品を殘した。その門下たる高井几董・黑柳召波等も亦よく師の風にならつた。かくて芭蕉時代に匹敵すべき一つの新しい所謂天明調の新俳風が確立されたのである。而してこの新俳風は、元來當時の文壇全般に亘つた復古的思潮に基いてゐるので、建部凉袋が片歌を唱へたり、蕪村や曉臺が好んで古典の語を用ひたりしたのも、その

傾向の一つのあらはれである。なほ天明調の先驅として橫井也有・炭太祇の名があげられるが、也有は實はその俳文に才を見るべきのみで、天明俳壇への寄與は多く認められない。太祇も蕪村と交りが深くその門人几董の句風には多少の影響を與へてはゐるが、やはり獨り自ら句作を樂しむ孤立的の人であつた。但しその平俗に墮しないで人事趣味の句を巧に作つた技倆は頗る見るべきものがあつた。

天明期の中興に力を盡した俳人たちも寬政頃には殆んど歿したが、なほ享和・文化の頃までは中興の後を承けてその餘光を支持した。蓼太門の完來・大江丸、白雄門の道彥・葛三・巢兆、曉臺門の士朗・素檗、蕪村門の月居等はなほ師の遺風を傳へ、又江戶の成美八王子の星布、奧羽の臼人・乙二・五明、信濃の一茶等もそれ〴〵一家の風格を具へてゐた。就中一茶は最も特色に富み、その辛酸な生活を背景とした特殊の性格が、常に強く句の表ににじみ出てゐる。かうして文化文政の俳壇まではなほ活氣が見られたが、その後俳諧は益々汎く普及され、寒村僻陬にまで俳諧宗匠の名を見られるやうになつて、却つて俳諧そのものゝ調は甚しく墮落に傾いた。小主觀に捉れて何等の詩趣もない句風が跋扈して所謂天保の月並調時代となつたのである。その首領としては江戶に田川鳳朗・谷川護物・上方に成田蒼虬・櫻井梅室等があつた。かくて俳諧は實質的には不振のまゝ幕末を經て明治に至り、正岡子規によつて再び改革が叫ばれたのであつた。

一、油糟・淀河 (Aburakasu. Yodogawa)

作者　松永貞德

體裁　橫本二冊

出版　寬永二十年初春　野田彌兵衛開板

內容　油糟は犬筑波集の附合の前句をとつて、これに貞德自ら附句を試みて、以てその附方の範を示したものである。例へば犬筑波に「霞の衣裾は濡れけり」を前句として、「佐保姬の春立ちながらしとをして」と附けたのに對し、貞德は「天人や天降るらし春の海」などゝ附けて、自家の風調を具體的に示して居る。なほ終に俳諧式目十箇條を和歌に詠じたものが添へてある。

淀河は犬筑波集の附句を前句として、更にこれに第三句を附け試み、且つ犬筑波の附句を批評し、自家の附句に說明を加へて、

作り物・同意・用附・俳言無き句等の事について説いてゐる。油糟と共に貞門俳諧の本領を知るためには、必ず讀まねばならぬ書で、同じく貞徳の撰んだ「御傘」と共に貞徳三部書と稱せられてゐる。なほ本書は普通淀河・油糟と二書の如く思はれてゐるが實は「新増犬筑波集」と題する書の上卷が油糟で、下卷が淀川である。それは淀川の序文の前にある内題と、その柱に「新下」とあり、油糟の柱にも「新」とある事によつて知られる。

圖　錄　(218) 淀河の表紙題簽　(219) 油糟の最初表半丁　(220) 淀川の最初表半丁

二、狗　猧　集 (Enokoshū)

作　者　松江重頼編

體　裁　美濃形大本　五　冊　なほ外に横本五冊(無刊記)・横本五冊(寛永二十一年甲申曆初秋上旬寺町通治右衛門開板)等があるが、この大本が最も早く刊行されたものと思はれる。

出　版　未　詳　(寛永十年若くはその後間もなくであらう)　寺町二條二町上大炊道場存故開板

內　容　自序によれば、守武千句・犬筑波集に既に入つたものは除き、その後の發句・附句のよいのを書き集めて、或る古老(貞德)の閲を乞ひ、用捨の詞を加へて一集としたものだといふ。貞德を始め德元・正友・玄札・望一・正章・西武・重頼・良德・親重等貞門の人々の作を主として集め、なほ別に上古俳諧の一卷に古人の附句をも收めてゐる。その撰集の業を始めたのは、寛永八年二月のことで、同十年睦月半に記し終つたといふから、貞門の句集としては最も早く撰ばれたものである。しかもその收めた所の句は、發句千五百二十八句、附句もまた千餘句に上り、作者の數は二百人に近い。まさに貞門最初の代表的句集といふべきである。

圖　錄　(221) 序文の始めの部分一卷の一丁裏　(222) 發句の最初の部一卷一丁表　(223) 附句の最後の部、四卷五十一丁裏と同五十二丁表

三、貞德紅梅千句 (Teitoku Kōbaisenku)

作者　安原正章編

體裁　橫本一冊（寶曆年間に半紙本二冊として覆刻されたものもある）

出版　明曆元年乙未五月　敦賀屋久兵衛開板

內容　貞德・友仙・正章・季吟・安靜・可頼・政信・長久等の俳諧百韻十卷追加一卷を收めてある。題名は卷頭の長頭麿の發句「紅梅やかの銀公のからころも」によつたのである。季吟の跋文によれば、この俳諧は友仙の催しにかゝるもので、それを正章が淸書して板行したのだといふ。全卷貞德の懇ろな捌きを受けたもので、貞門連句の作風を知るには、最も恰好の書である。

圖錄　(224) 表紙と題簽　(225) 卷頭の表半丁　(226) 最後の裏半丁

四、時世粧（今樣姿）(Imayōsugata)

作者　松江維舟編

體裁　橫本七冊

出版　寬文十二年三月上旬の跋がある、その時の出版だらう。

內容　維舟が寬文の始め頃、洛陽銅駝坊の南御所八幡宮の東に居を占めて以來、十年ばかりの間に唱和獨吟した連句發句に、知友の人々の作をも集めて六卷七冊にしたものである。單に維舟を中心とした句集としてのみならず、彼がその間遠く陸奥・筑紫に遊んだ旅行のさまや、當時の俳人の消息等を知るべき材料としても面白い。又卷首には俳諧が連歌を基とすべき事を始め、發句脇句以下の心得、附句の種類等について撰者の意見が述べてある。維舟の撰になる俳書は頗る多いが、この書は作品集として、俳論として、はた又史的資料として最も興味多いものであらう。

圖錄　(227) 第五卷表紙と題簽　(228) 序文一丁の表　(229) 第六卷跋文の最後

五、西山宗因千句 (Sōin-senku)

作者　西山宗因

體裁　横本二冊

出版　未詳　阿誰軒の俳諧書籍目錄によれば寛文十三年であるといふが、原本には刊記がない。

內容　宗因の獨吟百韻十卷を收めたもので、內題には「西翁十百韻」とある。古來談林派における代表的俳書として知られて居るが實は寛文十三年頃までは、まだ宗因の句風は貞門の古風を充分脫却しては居なかつた。況んやこの十百韻は全部が同時の作ではなくて、刊行以前の舊作を十卷だけ集めたものと思はれるから、この書を以て談林の句風を代表するものとするは當らない。寧ろ後に出た宗因七百韻・同五百韻等に、談林風の特色は窺はれねばならぬ。しかしこの書の最後の一卷懸誹諧の如きには、さすがに輕妙淸新の趣がすでに認められ、少くとも宗因の前半期における連句の代表的撰集として、充分の價値をもつであらう。

圖錄　(230) 上卷の表紙と題簽　(231) 上卷一丁の表　(232) 下卷三十七丁の表

六、西鶴俳諧大句數 (Ōkukazu)

作者　井原西鶴

體裁　横本二冊

出版　未詳（延寶五年であらう）

內容　延寶五年五月二十五日、大阪生玉本覺寺で、西鶴が一日一千六百句の獨吟を興行した。それを梓に上せたものである。當時この種の速吟多作を競ふことが流行し、日向では四百句、奈良では六百句獨吟したなどゝいふ噂があつた。それで西鶴もこの獨吟を試みて、大いに氣を吐いたのであるが、その後なほ西鶴以上の獨吟者が出たので、更に延寶九年四月、四千句の獨吟を興行し、遂には貞享元年住吉の神前で、一日一夜に二萬三千五百句といふ破天荒の神技に成功して、永久に俳諧大句數の記錄保持者

たる榮譽を贏ち得た。本書は上下二册から成るが、今上卷だけ傳存し、下卷を藏する所を未だ聞かない。

圖　錄　(233) 上卷二丁裏　(234) 上卷三丁裏、獨吟の第一卷の表八句である

七、誹諧本式百韻 精進膾 (Shōjinnamasu)

作　者　井原西鶴編

體　裁　中　本　一册

出　版　天和三年（明記してはない、推定）　大坂伏見呉服町　書林　深江屋太郎兵衛板

內　容　西鶴の主催で、天和三年三月二十七日高津の南見庵で、先師宗因の一周忌を營み、「詠むとて花にもいたし首の骨」を立句として、脇起の本式百韻一卷を興行した。それを上梓したものが即ち本書である。興行の連衆は西鶴を始め西吟・春林・西長・西武・西毛・西和・西虎・武仙の九人で、すべて西鶴門下の人々である。僅々十數丁の小册子にすぎないが、宗因の追善集でしかも西鶴の撰になるものであるから、最も珍重するに足る。且つ板下は題簽に至るまで、すべて西鶴の自筆である。

圖　錄　(235) 表紙と題簽　(236) 最初の一丁表　(237) 一丁裏と二丁表

八、武藏曲 (Musashiburi)

作　者　大原千春（チハル）編

體　裁　半　紙　本　一册

出　版　天和二年三月　京都　寺田重德板

內　容　京都の俳人千春が江戸に遊んで、諸家と風交して得た俳諧を集めたもので、諸家の四季發句及び歌仙・百韻竝に撰者の獨吟歌仙一卷等を收めてある。集中の作者は、撰者を始め談林の餘風を承けたものが多く、純蕉門の俳書とは言ひ難いが、卷頭に芭蕉翁桃青の名でその發句を揭げてあり、其角・素堂・嵐雪等の作もあつて、蕉風の俳諧が所謂次韻時代から、次の虛栗（ミナシグリ）時代に移

る過渡期の作風を代表するものとして知られて居る。

圖　錄　(238) 表紙及び題簽　(239) 序二丁裏と本文一丁表

九、猿　　蓑　(Sarumino)

作　者　去來・凡兆編

體　裁　半　紙　本　二　冊

出　版　元祿四年仲夏跋　井筒屋庄兵衛板

內　容　關西の俳諧奉行と稱せられた去來と、精采に富む句風を以て知られた凡兆とが、芭蕉の熱心な後援の下に編纂した蕉門諸家の發句連句集である。所謂幽玄閑寂を主とした蕉風の特色を、最もよく發揮したものとして、俳諧七部集中の白眉と稱せられて居る。これを許六が俳諧の古今集と稱したのも敢へて溢美の言ではない。全體六卷から成り、卷之六には芭蕉の幻住庵とその几右日記とを收めて居る。本書初版本には序文の最後に「元祿辛未歲五月下弦雲竹書」と識した一丁があるが、再版本以下にはこれを缺いてゐる。

圖　錄　(240) 乾卷表紙と題簽　(241) 序文の終りの丁裏と次の丁表

一〇、本　朝　文　選　(Honchō-monzen)

作　者　森　川　許　六　編

體　裁　美　濃　形　大　本　十　冊　(後に五冊・九冊・三冊等にしたのもある)

出　版　寶永三年九月跋　京都　井筒屋庄兵衛・野田彌兵衛板。なほ後刷本が頗る多い。

內　容　蕉門俳人の作になる文章を集めたもので、作家としては芭蕉以下其角・嵐雪・去來・丈草・許六・素堂・凡兆等蕉門の逸才を網羅し、全體を辭・賦・譜等二十餘類に分けて、體裁內容共に蕉門の代表的俳文集として、最も完備したものといふべきであ

る。本書はもと「本朝文選」と題して出版したのであつたが、のち支考などが、當時の俳文のみを集めたものに「本朝」と題するの不可なのを說いたので、その勸告に從つて「本朝」の二字を「風俗」に改め、且つ路通の「返店の文」を削り、その他二三の改修を加へて再版した。その改修の事情は越人の「猪の早太」によれば許六が列傳中に路通を罵つたからだといふ。

圖　錄　(242) 卷四の表紙題簽　(243) 路通の返店文の一部

二一、鶉　衣 (Uzuragoromo)

作　者　横井也有

體　裁　半紙本　十二冊（天保刷は四冊）

出　版　正篇は天明五年跋　蔦屋重三郎板、續篇は文政六年序　蔦屋板、他は不詳。天保十二年再版　大坂　鹽屋忠兵衛板

內　容　名古屋藩の重臣で俳諧を善くした横井也有の自撰俳文集である。也有は多能多才の人で、その俳文も雅中俗を點じ俗中また雅味を失はず、頗る縱横自在の筆致を見る。嘗て蜀山人がその「借物の辨」の一文を讀んで感歎措かず、紀六林が寫しておいた「鶉衣」の全本を乞うて、遂にこれを上梓するに至つたといふ。のちまた石井垂穗が殘つたものを集め、續篇・拾遺の二部として續刊した。也有の文藻は以てほゞその全豹が窺ひ知られる。

圖　錄　(244) 正篇上下表紙と題簽　(245) 正篇下の奥附

二二、新　華　摘 (Shin-hanatsumi)

作　者　與謝蕪村

體　裁　美濃形大本　一冊

出　版　寛政九年　大阪　鹽屋忠兵衛板

內　容　蕪村が安永五年の夏、其角の「花摘」に倣つて一夏中の發句を書けつけようと思ひ立つたが、病懶これを果さず、徒らに餘白

のみを殘したので、病やゝ癒えた後雲遊の昔を思ひ出て、そこはかとなく書き記しておいた。それを蕪村の歿後、門人月溪自から畫を加へ、蕪村自筆のまゝを板下として、梓に鏤めたのである。一夏の句は果さなかつたけれども、ために蕪村が常總地方に漂泊して居た時代のさまが知られ、彼の自叙傳としても興趣多く、又その豊かな文藻をも窺ふ事が出來る。

圖録　(246) 一丁表　(247) 月溪の挿繪の一つ

一三、春泥句集 (Shundei-kushū)

作者　黑柳召波

體裁　半紙本二冊

出版　安永丁酉(六年)冬十二月七日序

内容　蕪村門の逸才黑柳氏春泥舍召波の句集で、内題には「春泥發句選」とある。召波は夜半亭門下として、几董・大魯と共に最も俊秀の士であつたが、不幸安永六年師に先つて世を早くした。當時蕪村は「我が俳諧西せり」といつて、三度泣いてその死を悼んだくらゐであつた。本書は召波の子維駒(コレコマ)が父の遺稿を整理して出版したもので、板下は几董の筆にかゝる。なほ蕪村の序文は彼の俳諧論として、最も注意すべきもので、その自筆のまゝを板下としてゐる。

圖録　(248) 上卷表紙と題簽　(249) 序四丁裏と本文一丁表。序は蕪村の筆、本文は几董の筆である

一四、青田づら (Aotazura)

作者　太山亭素迪編

體裁　半紙本一冊

出版　文化九年仲秋刊

内容　建部巣兆が文化九年四月成田山に詣でゝ、その地の門人素迪の許に旅寢したをり、主人の撰集に畫を添ふべきよしを乞はれ

たので、江戸に歸つた後書き送つた。それが即ちこの書で、繪ばかりでなく板下も全部巣兆の筆耕になつて居る。集中の作者は巣兆・成美・道彦・一茶・乙二・蒼虬・雪雄・月居・素檗・樗堂等をはじめ、全國の俳人を網羅して居り、當時の俳壇を大觀する概がある。巣兆の序と成美の跋(この跋だけ成美自筆のまゝを板下にしてゐる)とが添へてあつて、素迪の撰とはいふものゝ、實はこの二大家の大きな後援があつた事を思はせる。

圖錄

(250) 表紙と題簽

(251) 巣兆の序の終りと畫

(252) 成美の跋文開き一丁

雜俳

雜俳といふのは前句附・冠附・沓附・五文字等俳諧から出て、更に簡單卑俗を旨とするやうになつた諸種の小詩形を、總括的に呼ぶ名稱である。而して是等の雜俳中最も古く起り且つ最も汎く行はれたものは、前句附で、川柳もまたこれを母胎として生れたのであつた。前句附といふのは俳諧の一句を題として、その前句に句を附けるもので、附合修行の一方便として夙く萬治頃から行はれて居た。しかしそれが都鄙に亘つて汎く流行し出したのは元祿以後の事で、當時京・大阪・江戸の著名の俳諧師は、大抵前句附の點者を兼ねて居り、前句附高點集も數多く出版された。特に元祿初年までは、まだその前句・附句共普通の俳諧の附合とあまり變らなかつたが、段々前句の題が簡單となり、例へば「美しい事〳〵」とか、「ぶらり〳〵とぶらり〳〵と」とかいふやうに、どんな句でも附け易いやうなものになつた。かくて勢ひ專ら附句の奇拔な趣向のみを競ふやうになつた。かうした傾向は年と共に增長し、もと俳諧修行の一方便であつた意味は全く忘れられた。且つ一方には點取の弊風が益々盛んになつて、かの三笠附のやうな博奕に類するものまで生ずるに至つた。かくて享保頃の雜俳は實質上甚しく衰運に傾いたのであるが、文運が江戸に移るや、こゝに又新たな發達を見るに及んだ。

江戸では夙く調和・不角等の點によつて、前句附もかなり盛んに行はれ、その後蝶々子・白應・竹丈等前句附專門の點者が出、特に收月は最も名高く、その寄句は二萬を越えるといふ盛況であつた。しかし江戸の雜俳が輕妙洒脫の趣を具へ、諷刺皮肉の人を刺す如きものを見るやうになつたのは、是等の前句附から出發したといふよりも、寧ろ元文以後江戸座の俳人達の間に、俳諧の附合に一句立ての趣向を喜ぶ所から起つたといつてよい。元來附合の高點句を競ふ事は、淡々一派の俳人が好んでやつた事で、この種の高點句集は元文・寶曆の交、京阪の方で數多く出版されて居る。しかもその多くは前句を省いて附句だけを集めて居り、從つて附味よりも一句としての面白味を尙ぶ事が主となつてゐた。この風は人事趣味に勝つた江戸座の俳人達には特に喜ばれ、寶曆以後かうした秀逸の附句集は江戸でも盛んに出版されるやうになつた。例へば湖十の「眉斧日錄」(寶曆二年)、祇德の「橘中仙」(寶曆十四年)、紀逸等の「金砂子」等の如きで、又「童の的」・「龍の聲」・「一座の華」・「俳諧觿」・「種卸」等の如く、多くの點者の高點句を集めて出版するものも出た。就中慶紀逸の「武玉川」は最も名高く、寛延三年初篇刊行後十八篇までも續刊された。この一句立として輕妙奇警を喜ぶ傾向は、直接前句附

にその影響を及ぼさずには居なかつた。かうして明和二年にかの名高い「柳樽」の初篇が生れた。

「柳樽」は江戸淺草に住んだ前句附の點者柄井川柳の點になる前句附集である。しかしこれは從來出版されたものとはちがつて、前句の題を示さず唯だ附句だけを收めて居る。即ち前句がなくても、一句で充分獨立した意を表はしたものだけを集めたので、單に內容のみから言へば從來の前句附がすでに前句にあまり重きを置いてなかつたのだけれども、しかもなほ形式的には前句を題として記してゐた。然るに「柳樽」に至つて全くその前句を示さなくなつたのは、やはり「武玉川」等の形式をまねたので、こゝにかの一句立を喜ぶ俳諧の影響が認められる。「柳樽」は初篇以來好評を得たので相ついで續刊され、初代川柳の選になるもの三十二篇、更に二世以下の選集が幕末までに百餘篇出版された。かくて此種の前句を省いた前句附集は他にも盛んに刊行されるやうになつたが、川柳點の「柳樽」がかくの如く最も名高かつたので、一般にこれを川柳とか柳樽とか呼ぶやうにさへなつた。而して最初はやはり前句の題を出して附句を集め萬句合といふ摺物にしてその中から佳句を選んだのであるが、天保頃からは全然前句なしに作られるやうになつた。

川柳は明和以後民衆に最も近い遊戯文學として、盛んに流行を見たのであるが、その輕妙な滑稽と皮肉な觀察とは、俳諧にも狂歌にも求められない唯一（ユニック）な味を持つてゐて、單に一種の風俗資料としてのみならず、人間の種々相を喝破したものとして、今なほ充分の生命をもつてゐる。しかし二代川柳以後はその趣味があまりに野卑猥雜に流れたり、或は謎的の趣向によつて強ひて落ちを取らうとしたりする傾向が多くなつて、殆ど文學として取るに足りないものとなつた。その間纔かに四世川柳の時代にやゝ初代の俤を傳へたのみであつた。要するに小說も俳諧も川柳も、すべてが幕末の頽廢氣分の中に潑剌たる生氣を失つて行つたのである。

一、咲 や 此 花 (Sakuya-konohana)

作者　靜竹窓菊子編

體裁　橫　小　本　一　冊

出版　元祿五年十月　江戸　萬屋・京　松葉屋・大阪　雁金屋板

內容　編者の自序に、「前句時勢の卷軸をもとめ賞吟妙句をとゞめ、是を攝花宗達のもとにうかがひまふで云々」とある如く、當時

大阪の點者として名高い由平・萬海・來山等の點になる前句附の高點を集めたものである。なほ外篇として似船點の發句及び附句の評語、言水・又玄等の點した前句附高點句を添へてある。その附句は普通の俳諧の附句に比して、特に前句附としての特色をまだ充分には表はしてゐないが、この種の前句附高點集中最も早く刊行されたものとして、注目されねばならない。

圖録 (253) 序文一丁表 (254) 十四丁裏と十五丁表

二、家の風 (Ienokaze)

作者 堀内雲鼓

體裁 小本一册

出版 正德二年九月 京都 野田治兵衛板

內容 京都の點者雲鼓の點した笠附の高點集である。雲鼓はこの外笠附・前句附の撰集として、西國船・銀要(ガナメ)等の編があり、いづれも京都に於ける雜俳の句風を最もよく代表したものと言ふべきである。なほ本書は例へば「ても扨も、表太々といふはフウンあれかいの」といふ句に、「表太と云者酒を樂て月花に遊ぶ也」とか、「よいものぢや、赤團子から坊ンが無事(まめ)」の句に「赤團子、灸也」とか注してあつて、當時の風俗言語資料としても面白い。

圖録 (255) 序文裏と口繪

三、誹諧武玉川(初篇) (Mutamagawa)

作者 慶紀逸

體裁 小本一册

出版 寛延三年 江戸 松葉軒植村藤三郎板

內容 自ら序の中に「日々愚判の卷々秀逸とする句々書留め置侍るを、此度書肆の需に應じて梓に行侍る。右附合の句々その前句

を添侍るべき所を、事繁ければこれを略す。」と言つて居る通り、紀逸の判した巻中高點句だけを抄出したものである。爾來なほ續刊して寶暦六年には第十篇を出し、その後題名を「燕都枝折」と更め、十八篇まで出版された。句は元來俳諧の附句であるから、五七五のも七七の句もあるが、その句風は例へば「丈くらべ手を和らかにさげて居る」の如く、全く一句立としての興味を喜んだので、後の柳樽等に本書中の句が多く燒直されて居るのを見ても、思ひ半ばに過ぎるであらう。

圖録 (256) 表紙と題簽　(257) 扉と序文一丁表

四、誹風柳樽（初篇）(Yanagidaru)

作者 呉陵軒可有編

體裁 小本一册

出版 明和二年七月　江戸　花屋久治郎板

內容 江戸の前句附點者柄井川柳の點になる萬句合の摺物の中から、前句を省いて一句だけでも句意のわかり易いものを選び出して、その門人可有（別號木綿）が一册に編し、明和二年始めてその初篇を刊行した。爾來この種の書中最も汎く行はれ、初世川柳の歿後も五世に至るまで年々續刊して、天保三年には百二十二篇に及んでゐる。なほこの柳樽は後刷のものが多く、丁附の順序等も初版とは大分ちがつてゐるが、特に寛政の改革以後風俗上面白からぬ句は削られたゝめ、その後出版されたものは、句にも多少の異同がある。

圖録 (258) 序文裏と本文一丁表　(259) 本文最後四十三丁裏と奥附

狂　歌

狂歌を定義して、滑稽なる短歌とするならば、「萬葉集」の戯咲歌、「古今集」の誹諧歌、「金葉集」の連歌、及び鎌倉時代の軍記物に散見する落首の類は、すべて狂歌と云ふべきである。しかし戯咲歌は概ね單なる人身攻撃なる點に於て、誹諧歌は優美に過ぎる點に於て、連歌は作者が二人なる點に於て、落首は滑稽よりは寧ろ諷刺を狙ふ點に於て、それぞれ後世の狂歌からは區別される。そこで更に狂歌をば、近代の俗語を以て自由に滑稽を盡した短歌、と定義する。此の定義に當てはまる歌、即ち眞の狂歌を詠んだ人は、先づ鎌倉時代では、曉月坊位なものであらう。その頃は歌人や連歌師も、まゝ狂歌を洩したが、無論餘技としてゞあつた。曉月坊以後專門の狂歌師なく、狂歌は微々として振はなかつた。

室町時代に入つては、「七十一番職人歌合」、「十二類歌合」、「調度歌合」、「永正歌合」などが出て、狂歌は稍々復活された觀があるがそれ等の作者は不明である。

ところが此處に注意すべきは、山崎宗鑑の俳諧の連歌である。俳諧の連歌は、そのこゝろの滑稽なる點に於て、そのことばの自由なる點に於て、正に狂歌の連歌である。宗鑑の後に出た松永貞德は、俳諧師でかつ狂歌師であつた。「貞德狂歌集」の著がある。その門人半井卜養・石田未得は、共に江戸に在つて、俳諧の連歌から、狂歌を分離せしめた。卜養には「卜養狂歌集」があり、未得には「吾吟我集」がある。この故に近世狂歌の源流は、鎌倉時代以來の狂歌、及び俳諧の連歌の二方面に、求むべきである。

貞德は和歌と連歌を、細川幽齋に學んだのであるが、その幽齋の姉の子が、雄長老であり、「雄長老詠百首狂歌」なる家集がある。「新撰狂歌集」は、元和年中この人によつて編まれた。雄長老よりは少し後れて、豊藏坊信海と、生白堂行風が出た。信海は鯛屋貞柳の師で、家集を「鳩杖集」といふ。行風は烏丸光廣卿を通じて勅許を仰ぎ、寛文六年に「古今夷曲集」、同十二年に「後撰夷曲集」を出したが、自身の狂歌には秀逸が少い。

寶永から享保にかけては、浪花の油煙齋貞柳及びその門流が、上方狂歌壇の牛耳を執るのである。貞柳の家集は「家土産」、「續家土産」といふ。江戸の狂歌、天明調の狂歌は、唐衣橘洲・朱樂菅江・四方赤良等によつて創められた。その第一歌集が「若葉集」である。次い

で天明三年赤良撰「萬載狂歌集」、同五年同人撰「後萬載集」、菅江撰「故混馬鹿集」、同七年赤良撰「才藏集」以下、夥しい狂歌書が出版されて、こゝに江戸狂歌の黄金時代が現出されるのである。

先づ赤良の四方側、橘洲の醉竹側、菅江の一連を始として、本町側・壺側・巴水連・芍藥連・五側など、頻りに社中を結び、月並會を催して、武士も町人も俳優も藝人も、各々狂歌を樂しんだのである。

その後文化の初、四方側の狂歌堂眞顏と五側の宿屋飯盛が、狂歌の淵源に對する見解を異にし、前者は狂歌誹諧歌說、後者は狂歌落首說を主張して互に讓らず、各々三千の同人を率ゐて爭ひ續け、それが爲に狂歌壇は、未曾有の活氣を呈した。各社中は續々と同人集を出す。それが皆給入の仲々凝つたものであつた。「四方の巴流」はその一例である。

文政六年には、江戸狂歌界の第一人者なる赤良が死に、同十二年には眞顏が死に、翌天保元年には飯盛が死んで、こゝに天明調沒落の日が來た。芍藥亭長根は、文政調といふ俳諧體の狂歌を以て、頽勢の挽回に力めたが、駄目であつた。天保以後は内外多事の秋、他の一般文藝とゝもに、狂歌もまた衰滅して了つたのである。

一、新撰狂歌集 (Shinsen Kyōkashū)

作者　雄長老

體裁　美濃半裁本　一冊

出版　刊行年月不明。卷末に大阪冬の陣(慶長十九年)の落首が、收められて居るから、多分元和中のものと推定する。

内容　狂歌撰集の陳呉であり、全一册が上下二卷に分れ、上卷は二十九丁で、春・夏・秋・冬・戀・羇旅・述懷、下卷は二十七丁で、釋敎・哀傷・神祇・雜となつて居る。それぐ〜古今自他の狂詠を、集めたのであるが、流石に滑稽奇抜なものが多い。

冬の夜のしこしがてらに見る月は面白しこてやがて引つこむ　(大江のこゐもち)

呉竹のふしみにもなくはるばると京までこりにのぼり棹かな　(雄長老)

下卷の雜に落首の多い事と、俳諧の連歌を、そのまゝ狂歌として、收めて居る事とは、共に注目に値する。

圖錄 (260) 一丁目の表

二、詠百首狂歌 (Ei-hyakushu Kyōka)

作者　雄長老

體裁　美濃半裁本一冊(紙數二十五丁)

出版　刊行年月不明　多分寛永頃のもの

內容　貞德の狂歌は平明溫雅であるが、雄長老のは奇矯飄逸である。貞德は落首を詠まなかつたが、雄長老は好んで詠んだ。だから面白いが、それだけに往々卑猥に流れる憾みがある。

まさひつゝ藤にしたゝかしめられてなんぎさうなるまつふぐりかな

金ひろふ夢はゆめにて夢のうちにはこするこ見し夢はまさゆめ

圖錄 (261) 二丁目裏ミ三丁目表。各題の下に小書してあるのは、也足軒(中院通勝)の判詞である。

三、吾吟我集 (Gogin Wagashū)

作者　石田未得

體裁　美濃判二册

出版　刊行年月不明　但し慶安年中の京版だこ言はれる。その後寶曆七年には江戶、安永五年ミ寛政八年の兩度には、大阪で重刻されて居る。

內容　未得の家集十卷を收めたもので、書名は古今和歌集をもぢり、序文も同書假名序をもぢつて居る。これが狂文の最初であらう。

圖錄 (262) 上卷本文の最初

四、古今夷曲集 (Kokon Ikyokushū)

作者　生白堂行風

體裁　美濃版二冊

出版　寛文六年五月　元祿五年と元文五年に重刻本がある。本書は元文五年版。二冊本は内容不足して居る、天保頃にそれを補足して寛文の舊に復したものが刊行されたといふ。

内容　その名の示す如く、古今の作者二百四十一人の狂歌千五十餘首を、十卷に輯錄したものである。「後撰夷曲集」の跋によれば本書は後陽成院の八宮、智恩院門跡良純法親王の御手を經て、後西天皇の叡覽に供へられた。大體の撰は承應三年迄に出來上り、それに近詠九首を追加し、寛文五年冬迄に稿を整へ、翌年に刊行したのである。

圖錄　(263)　上卷本文の最初開一丁

五、若葉集 (Wakabashū)

作者　小島橘洲

體裁　美濃版二冊

出版　天明二年初夏　江戸　近江屋本十郎板

内容　橘洲と置來の序がある。置來とは内山椿軒の長子の隱名であるが、此の序は實は椿軒自身の筆なる由、蜀山人の「奴凧」に見えて居る。椿軒は和漢の學に通じ、狂詠にも秀でゝ居た。橘洲・菅江・赤良の徒は、彼に就いて和歌を學ぶ中、いつしか狂歌の方へ傾いたのである。橘洲は「弄花集」序に於て、「貞柳・卜養の風を庶幾せず」と揚言して居るから、彼等の狂歌は、傳統の狂歌からは、全く解放された獨自のものである。上卷は内山椿軒・朱樂菅江・濱邊黒人・蛙面坊・平秩東作・元木網以下。下卷は四方赤良・智慧内子・鹿津部眞顏・大根太木・ふる瀨勝雄・唐衣橘洲以下の詠を收めて居る。自由で淸新で輕快なる天明調の第一

聲こして、注目すべき書である。

圖録　(264) 上卷の表紙　(265) 下卷の卷頭

六、四方の巴流（Yomonoharu）

作者　狂歌堂　鹿津部眞顏

體裁　中　本一册

出版　文政十一年

內容　初に吉原五明樓の遊女花扇の題字、次に門人萬龜亭江戸住の序文、及び眞顏自身の五言絶等を掲げ、本文は芦邊田鶴丸以下全國に亘る連中の狂詠に、故人橘洲・菅江・木網・全交・三和・京傳・白猿・杜若・路考・焉馬等諸名家の詠を交へ、その間路考・團十郎・京傳などゝ署名した繪を、挿んで居る。

圖録　(266) 團十郎自筆の挿繪　(267) 本文の初

狂詩

曰く黄表紙、曰く洒落本、曰く川柳、曰く狂歌、曰く狂文、何でも洒落のめし滑稽化しようとするのは、明和から安永・天明にかけての江戸文壇の風潮であつた。狂詩もまたこの時代相の反映として現はれた一種戯謔の文字である。勿論漢詩の體を假つて滑稽の言を弄するのは、必しも當時に始つた事ではない。平安朝以來行はれた事で、例へば「本朝文粋」中の源順の題夜行舍人狂歌の如き、三浦安貞はこれを以て狂詩の權輿として居る程である。降つて五山の緇徒の間に聯句が大いに行はれた頃、餘興的に狂詩體の作を行つたものも多く、又江戸時代に入つては、野郎遊女の評判記等に、狂詩をまじへることが流行した 更に寶暦年間には「古文鐵砲前後集」といふ古文眞寶に倣つた狂詩文を集めたものも刊行され、都賀庭鐘の「漢國狂詩選」なども出た。しかし狂詩が少くとも文學史上に小さな一分野をでも占めるやうになつたのは、寢惚・銅脈の二先生を得てからの事であつた。

寢惚先生とはいふまでもなく、大田南畝の事である。彼の行くとして可ならざるなき才は、狂詩に於いても亦一生面を拓き、明和四年まづ「寢惚先生文集」を陳奮翰といふ戯名で出し、更に安永年間には「李不盡通詩笑知」を始め數篇を世に公にした。これと時を同じくして京都聖護院の寺侍畠中頼母は、明和五年まづ「太平樂府」を出し、爾來銅脈先生の名を以て上方の狂詩壇に覇を唱へ、寛政二年には南畝と共に「二大家風雅」の著があり、兩者の技倆相伯仲して、まさに狂詩壇場の二大家たる名を辱しめなかつた。其の外江戸にはなほ娯息齋・方外等の輩があり。上方には愚佛・安穴等の徒相ついで出たが、いづれも寢惚・銅脈二家の後塵を拜するに過ぎず、特に天保以後はその格調も頗る紊れて、徒らに卑野猥雜の詞句を弄するやうになつた。しかしその流行は益々盛んで、文政以後狂詩集として單行されたものだけでも約四十種に上り、又明治に入つては各種の新聞雜誌に、必ず狂詩の一欄が設けられる程の盛況であつた。だが狂詩の本領は、この二大家時代に既に發揮し盡されて居たのである。

一、太平樂府 (Taihei-gafu)

作者　胡逸滅方海（畠中銅脈）

體裁　小　本一冊

出版　明和五年八月序　京都　錢屋惣四郎板

內容　江戸の寢惚先生と相對して、上方に於ける狂詩界の雄であつた銅脈先生が、最初に出版した狂詩集である。その體甚しく亂れず、しかも滑稽の才が縱橫にはたらいて居て、實に狂詩としての代表的風調を具へてゐる。その後自ら新編太平樂府・太平遺饗二篇を選び、又安穴の太平新曲・太平二曲・太平三曲、愚佛の續太平樂府・太平文集・太平詩集・太平風雅等、太平の名を冠したものが多く、明治に至つてもなほ明治太平樂府が出るなど、狂詩集に本書を規模としたものが多いのは尤もな事である。

圖錄　(268)　序文四丁裏と本文一丁表

二、本町文粹 (Honchō-monzui)

作者　腹唐秋人（中井喜右衛門）

體裁　小　本一冊

出版　天明六年正月　江戸　天作堂板

內容　本書の後刷本には、その見返しに「江戸繁昌記」と題して居る如く、主として江戸の景物を詩題とした狂詩集である。その體は五古・七古・五律・七律・五絕・七絕に亘り、格調も後のものゝやうにあまり俗惡でない。書名は作者が江戸本町に住して居たのに因んだので、「本朝文粹」のもぢりたることは言ふまでもない。

圖錄　(269)　序文二丁裏と本文一丁表

三、狂詩諺解 (Kyōshi-genkai)

作者　四方山人（大田南畝）

體裁　小　本一冊

出版　天明七年正月　江戸　蔦屋重三郎板

内容　作者が獨に著はした李不盡通詩選笑知（五絶）及び李不盡通詩選（五七言古・五七言律）につぐべく、七言絶句の體で作つた狂詩を集めてある。その諺解と題したのは、自ら詩中の文句を解して、例へば「二丁町詞」中の詩句「牡丹紅葉菊香凝」を、「牡丹紅葉を一説に吸物の事とす。甚非なり。牡丹は福牡丹にて三升のかへ紋、紅葉は四ツもみぢにて新車のかへ紋、菊は名代の瀬川帽子濱村屋大明神さま〳〵〳〵云々」等と註してゐるからである。本文も註も共に輕妙で、作者の行くとして可ならざるなき才を見る事が出來る。

圖録　(270) 序文二丁裏と本表一丁表　(271) 本文最後二十六丁裏と奥附（この奥附の刊記は他本の奥附を流用したものと思はれる）

咄本

咄本とは、落語を、文字によつて、固定したものである。それは歌舞伎の脚本や、淨瑠璃の院本と同じく、單なる落語の筋書に過ぎない。だからそれは落語の總てゞはない。

落語と云ふのは、一篇のうちに、必ず笑の中心とか、笑の極點とかを含む小話を、ジェスチュアを交へて話す一種の話術である。そんな話術を創めたのは、安樂庵策傳である。策傳は京都誓願寺塔中竹林院の僧で、茶の湯と落語を以て、廣く諸侯の門に出入し、至る所で重寶がられた。そのはなしを集めたのが、「醒睡笑」である。「昨日者今日能物語」も、彼に似たお座敷向の落語家が、書いたものであらう。

「醒睡笑」の刊本は、寛永五年に出たのであるが、その後慶安元年と、萬治元年の兩度に亘つて、重刻されて居るのを見れば、最初大名の間に喜ばれた落語が、漸く民衆一般にも、享樂される樣になつた事が解る。

寛文頃には、「私可多咄」で有名な中川喜雲が居り、元祿頃には、京に露の五郎兵衛、大阪に米澤彦八、江戸に鹿野武左衛門等が居つた。孰れも街頭或はお座敷で落語を演じ、また咄本をも刊行して、名聲を博した。

その後も依然として、落語家は存在したが、名人が出ず、從つて新作も無く、たま〳〵出版された咄本も、前書の摸倣と剽竊に終始して居る。「鹿の子餅」なども、その例に洩れない。安永・天明の頃、風來山人、戀川春町、市場通笑、朋誠堂喜三二、烏亭焉馬等が、文士として落語の創作を試みて以來、斯界は急に活氣を呈した。殊に焉馬は熱心で、屢々落語の會を催し、同人がそれ〳〵新作を持ち寄つて、自らそれを演じ、互に批評し合つたりした。彼が江戸落語中興の祖と云はれるのは、その爲である。

黄表紙や洒落本や狂歌で以て、人生を洒落のめした其の頃の江戸人は、どうして落語を見落さう。咄本は大いに歡迎された。そして寛政三年には、江戸に始めて寄席が出來、職業的落語家が輩出した。その先驅をなす者は、櫻川慈悲成である。その門人が、吉原や深川で、男藝者として、お座敷を勤めた事は、「梅暦」などにも書かれて居る。

文化文政頃には、三笑亭可樂、三遊亭圓生、船遊亭船橋、桂文治、朝寢坊夢樂、林屋庄藏等の名人が現はれ、咄本も續々刊行された。

彼等は扇子一本、手拭一筋、湯呑一個と、たゞこれだけで以て、凡ゆる世界を表現する。その素晴しい藝當は、實に驚嘆に値する。

十返舍一九、式亭三馬、瀧亭鯉丈等の滑稽本は、孰れも落語と密接な關係を、持つて居る。即ち滑稽本は落語から、その素材を得、落語は滑稽本の影響を受けて、人生或は社會の描寫を細かくした。從來短かつた落語が、段々と長くなつたのは、それが爲である。

一、昨日者今日能物語 (Kinōwakyō-no-Monogatari)

作者 不　明

體裁 美濃版大形本　二　冊(木活字。序も跋もない)

出版 刊行年月不明。但し京傳は、その「骨董集」の上編中卷に於て、「きのふはけふの物語、刻梓の年號なしと雖も、寛永の書と定むべき證あり」と述べてゐる。書中に織豊時代の事實が多い事、及び「秀忠公より禁中樣御作事の時云々」などの記事あることから推して、大過はないであらう。

內容 もとは寫本で上下二冊に分れ、百五十三條の笑話が、收められて居る。中には隨分猥雜なものがあり、上の卷の終が殊にひどい。刊本にはそれらは多く省かれて居る。

圖錄 (272) 本文の始　(273) 上卷本文の終

二、醒　睡　笑 (Seisuishō)

作　者　安樂庵策傳(本名　平林平太夫)

體　裁　中　本　三　冊

出　版　慶安元年初秋(寛永版・萬治版もある)

內　容　全體を八卷、四十項に分ち、三百餘條の笑話を類聚し、時に詩歌や短評を挿んで居る。多くは自作或は他作のつくり咄であるが、中には戰國時代の落書、及びその他の事實談も交つて居る。兎に角滑稽小咄の鼻祖であり、後世の輕口落語などの基を、

開いたものである。作者の自序によれば、此の書は元和九年に出來上つたらしいが、京都所司代板倉重宗の奥書によれば、元和元年稿を起し、一兩年後に書き了へて、彼に贈られたと云ふ事になつて居る。且つもとは話の數も千有餘あつたが、刊本はその一部分を抜萃したのである。

圖　録　(274) 第一册の作者自序　(275) 第三册の終

三、鹿の巻筆 (Shika-no-makifude)

作　者　鹿野武左衛門

體　裁　半紙本五册

出　版　貞享三年　江戸版

内　容　通巻三十四篇の笑話を収めて居る。三の巻「堺町馬の顔見世」の如きは、實に人情の機微に觸れたもので、思はず噴き出さずには居れない。古來馬が物言ふ咄として、有名である。作者が罪を得たのは此の咄の爲で、同時に本書は絶版を命ぜられた。

圖　録　(276) 第二册本文の始　(277) 第一册の總目録　(278) 第四册「表具屋の掛物」の挿繪

四、輕口露が噺 (Karukuchi Tsuyu-ga-Hanashi)

作　者　露の五郎兵衛

體　裁　半紙本五册

出　版　元祿四年

内　容　通巻八十八篇の小咄を集めたもの。元祿十一年の「露新輕口咄」、寶永二年の「輕口あられ酒」、同四年の「露休置土産」は、いづれも本書の姉妹篇である。

圖　録　(279) 第二册目録の終と本文の始　(280) 同挿繪(十五、舞まひと百姓と口論の所)

五、稿話 鹿子餅 (Kanokomochi)

作者　山風（木室卯雲）

體裁　小本三冊

出版　明和九年正月　江戸　紙屋德八版

內容　「桃太郎」以下小咄六十一篇。後篇は「譚嚢」といひ、同じく明和九年に出た。馬場雲壺などいふ隱名を用ひて居る。

圖錄　(281)　第一冊の始（肖像は卯雲であらう）　(282)　第三冊の終

評判記

江戸時代の町人に、與へられたる自由の世界は、遊里と芝居である。何程金を積んでも、町人は町人である。この事が自然に、彼等を享樂主義者たらしめた。而も一方では、嚴格な儒数道德が男女關係を極端に窮屈にして了つた結果、抑へきれぬ性慾の安全瓣として社會は必然的に、遊女と野郎の存在を、認めざるを得なくなつた。此處に於て各地の遊里が繁昌し、殊に京の島原、大阪の新町、江戸の吉原は、夫々の特色をもつて、大いに賑つた。また遊女の中にも、多少文藝遊技の素養があつて、身分ある人の遊び對手としても、決して恥しからぬ者が多かつたので、町人は勿論、武士までも遊里に出入し、それを無上の樂しみまたは誇と、考へたのである。そこで遊里遊女の消息に通じた粹人は、慰み半分に、遊廓案内の樣なものを書いた。それが遊女評判記、或は遊里細見記である。

遊女評判記の一等古いものは、明曆元年版の「桃源集」である。次いで「難波物語」、「朱雀遠目鏡」、「島原大和曆」、「島原袖鏡」などがあり、吉原には「吉原大雜書」、「吉原讃嘲記時の太皷」、「吉原雀」、「吉原呼子鳥」、「胡椒頭巾」、「吉原三茶三幅一對」、新町には「まさり草」、「新町おかし男」、「難波鉦」などがある。

延寶九年の「長崎土產」は、それ以前の評判記の凡ゆる形式を集大成したもので、單なる品定めではなく、小說的記述を含んで居る。即ち延寶五年の「たきつけ・もえくひ・けしずみ」が、老人と若者との會話によつて、島原の花魁を評判したのと同樣に、之は嫖客と遊女上りの女との會話の間に、丸山の遊廓を描き出さうとするのである。元來問答體を以て、ある物語を展開せしめるのは、江戸初期の假名草紙に、よくある手法である。「長崎土產」はそれに倣つて、行き詰つた評判記に、新生面を開いたものである。西鶴の浮世草紙は、此の種の評判記や細見記に、負ふ所が多い。この故に遊女評判記は、野郎評判記と共に、假名草紙と浮世草紙との間をつなぐ飛石である。その點に於て相當の文學史的價値をもつ。

役者評判記は、最初野郞評判記であつた。即ち技藝よりは寧ろ容貌風姿の批評に、重きを置いたのである。その最も古いのは明曆二年の「役者の噂」であるといふ。次いで萬治二年に、京から「野郞蟲」が出た。體裁は明曆元年の「桃源集」、同二年の「まさり草」と全く同一で

ある。序文は第三者の談話に擬して、野郎の害を說き、本文は各役者の名前の上に、それ〴〵の定紋をつけ、評語の終にその名を詠み込んだ狂詩狂歌を添へて居る。寛文二年江戶版の「剃野老」以下、同じ樣なものが追々出たが、元祿五年の「役者みゝかき」に至つて、初めて位附をした。これも遊里細見記からの影響である。元祿六年の「雨夜三杯機嫌」から、同十一年の「役者樓棡箒」に至る間に、位付は段々細密になり、その批評も容色のみに止まらず、俳優の所作や科白にまで及び、正しき劇評たらんとする傾向を示した。かくて元祿十三年三月には、「役者口三味線」が出版された。作者は江島屋其磧、畫工は西川祐信、版元は八文字屋自笑である。正本屋や鶴屋も評判記は出したが、作者畫工製本の三拍子揃うた八文字屋のには、とても叶はなかつた。そこで評判記の出版は、八文字屋が獨占した。

初は顏見世狂言の評判を、翌年正月二日に、賣り出すのみであつた。それが後には二の替り即ち春狂言のを三月に出し、更に三の替り即ち盆狂言のをまでも、出す樣になつた。それ等は孰れも小形の橫本で、京の卷・大阪の卷・江戶の卷と、三ヶ津三册になつて居り小說めいた序文が附いて居る。

其磧の死後は、八文字屋の評判記も、面白くなくなつた。がそれでも橫本三册なる傳統的形式を守つて、維新前後まで、年々の出版を怠らなかつた。それが爲め文運東遷の後と雖も、江戶はその役者評判記を、京の八文字屋に仰がねばならなかつた。その小說的序文も、所謂八文字屋本の浮世草紙が出てからは、槪して簡單となり、之に反して位付は益々細かく、藝評は愈々精しく成つて行つた。

一、桃源集 (Tōgenshū)

作者　未　詳

體裁　中　本　一　册（紙數三十六丁）

出版　明曆元年

內容　遊女評判記としては一等古い。京島原のものであるが、跋にもある通り、島原の音讀が桃源に通ずる所から、かくは名づけたのである。松の部十三人、梅の部四十人の容色その他を、品評したもので、各々その名を詠み込んだ狂歌と狂詩を添へて居

る。序文は古今集序を傾城事にもぢつたもの、跋は和漢女色史とも云ふべきものを、漢文で書いて居る。

圖録　(283) 序文（右方に貼つてあるのは、表紙の題簽のはしくれ）　(284) 松の部八千代・小藤評判のところ　(285) 跋

二、吉原三茶三幅一對 (Yoshiwara-Sancha Sambuku-Itsui)

作者　不明

體裁　半紙本一冊（紙數三十六丁）

出版　延寶九年春　江戸　桝屋版（本書は影寫本）

内容　吉原散茶女郎の評判記である。散茶はもと風呂屋女として、市中に散在して居たが、寛文五年に廓内へ収容された。太夫や格子とは違つて、滅多に振らぬといふので、さう呼ばれたらしい。寛文以後は武士の嫖客が減じ、吉原は全く町人の世界となつたので、手輕な散茶がよく賣れたのである。その散茶を買ふ人のために、「女郎の面體、髪のかゝり、立すがた、藝能の善惡、一座のはたらき、お茶つぼの持かけげんまで」精しく調べたと、序文に書かれて居る。延寶三年の「山茶やぶれ笠」、延寶八年の「散茶評判胡椒頭巾」なども本書の類で、散茶のみの評判記である。太夫・格子の評判記は、また別に存在したのである。

圖録　(286) 序文　(287) 挿繪　(288) 本文の始

三、役者略請状 (Yakusha Yatsushi-Ukejō)

作者　江島其磧（畫師　西川祐信）

體裁　小形横本三册（京の卷・大阪の卷・江戸の卷）

出版　元祿十四年三月　京　八文字屋版

内容　各册に小説的結構を有する序文を附け、役者評判を開くに至つた徑路を説明して居る。この序文が發達して、所謂八文字屋本となるのである。京の坂田藤十郎・水木辰之助、大阪の嵐三右衛門・片岡仁左衛門、江戸の中村七三郎・市川團十郎以下の諸

優の藝を、上々吉から中までの六級に分つて、それぐ品隲したものである。

圖録

(289) 京の卷の目錄（八文字屋本のそれと、書き方が同一である）

(290) 立役上々吉阪田藤十郎評判の所

(291) 大阪の卷の挿繪（道頓堀立慶町の役者評判所へ諸人參集し口々に意見を述べる所）

(292) 江戸の卷の終

江戸文學圖錄解說篇（終）